

『無の神学』を読む⑧ 第一部 無の神学原論

『無の神学』 第一部 第十三章 「新宗教改革」

2002年11月17日(東京 新宿)

●キリスト道講演会のあと

教会から出てしまいますと、あと残された教会は依然として元のままということで終わってしまいます。まずは自分の属しておられる母教会で、自分の受けた感動を表現し改革の叫び声をあげたら、

「それは違うよ、それは異端だ。教会から出たまえ」

といって追い出されたら、仕方ありません。キリストはそうやってどこへ行っても追い出されてしまったわけです。パウロもどこへ行っても追い出されてしまった。

「足の塵を払って出てきた」

というふうに書いてあります。弟子たちもそうです。そういう形で追い出されてしまったらしようがありませんけれど、出来うべくば、その教会に留まって、そこで火を燃やしていただきたい。両方かけもちできれば、こんな嬉しいことはないんですけれど。2週間に1回とか、ちょうど私が隔週、東京と京都を往復してましたように、母教会とこちらと両方かけもちできれば、それに越したことはありません。何かそういう形で、蒔かれた種を花咲かせるようにしていただくことが、私の一番の願いです。そうでありませんと、私たちが積極的にどこかの教会の方をこっちに引っぱりこみますと、それは引き抜きとか、そういうふうに見られます。講演会というのは公開の席で話すことですから、それはこちらに責任はないんですけれども、向こうさまから見たら、

「ああ、あの講演会で新宿集会は私の所の大事な○○兄弟を引き抜いたな」

ということになりますと、よろしくありませんので、そのところはくれぐれも、できることならば波風が立たないようにして、両者にプラスになるようにしていただきたい。それが私の願いです。でも、来てくださることは、私はとても嬉しいんですよ、本当に。永住帰国してもらいたいくらいのもりだけれども(笑)、そこはやはり日本の教会全体が共にキリストの証をしていくという大きな使命をいただいています。

今日は、「新宗教改革」という所を取り上げるけれども、そこで小池先生が叫んでおられることが正にそれなんです。形はどうであつてもいい。信条だ、形式だ、礼拝様式だ、会堂がどうであつてもいい。本当に大事なものは何か。それだけをしっかりと掴んでほしい。そうしたら、むしろ諸宗派があつていい、更には諸宗教があつていい。それを全部包んで



いこうではないかと。それが本当の大和の道である。どの宗教も行き着く所は全部一つの靈法に帰する。「万法帰一」ということを書いておられます。靈法に帰する。キリストの場合だったら、御靈の愛の法のりです。「生命いのちの御靈みたまの法のり」です。その本質は愛である。「生命の御靈の法」、これはパウロのローマ書8章の言葉ですけれども。これは生命を持った御靈の祈りと言えますし、御靈の生命の法とも言えますし、御靈・生命・法、これは一つなんです。そういうものが人を生かす。そういう人を生かす愛の法なんです。これが仏教だったら、「大慈大悲」という言葉が出てきます。論語だったら、「恕じよ」。孔子の場合には恕、恕ゆるすという、それから「仁」とかいう言葉が出てきます。禪宗の方はどちらかというと、「悟り」という方ですから、自分が悟って天地一如、天界と自分は一つ。ということとでそこじつとしてますと、波及効果がちよつと少ない。キリストの方でしたら、本当の自分が天地一如になると、なにせ天の神さまは能動的な神さまですから、自分を地に自ら下ろします。

よく小池先生は「実存」という言葉を使われますけれども、その源はどうも、「ズブイエクト」、「サブジェクト」(subject)という「主体」、人間は自分が主体だと思っていますね。「客体」のことを「オブジェクト」(object)、「対象」は「オブジェクト」といいます。あの「サブジェクト」の「サブ」というのは「下へ」ということ。「サブウェイ」(subway)というのは「地下鉄」です。つまり、自分を下に置く、自分を投げ出すというのが「サブ」(sub)。「ジェクト」(ject)というのは「投げ出す」。だから、「サブジェクト」というのは「自分を下へ投げ出している」ということ。ヤハウエーの神さまは「実存」の神さまだと言われます。それはどういうことかというのと、「自らを下に投げ出して」、目的は庶民を救うということ。我々人間どもを救うために、高き所にいらつしやる神さまが己を投げ出して、あの民の苦しみを見てモーセを遣わして、モーセと一緒に働いて、出エジプトをさせてくださった。

これが今度はキリストになりますと、天の高みに父と共にいらつしやった靈なるキリストが、マリヤさんの中に宿る。そういう姿によつて人となつて、そして我々の苦しみを味わい、我々と同じ姿で歩んでくださつて、我々の苦しみ悲しみすべてを担つて、そして犠牲の死を遂げてくださった。もうそれ自体が全部、能動的な神さまの働きなんです。神は絶えず働いておられる。働いておられる神さまです。キリストも物凄く働かれました。食する暇もないほどに働かれました。小池先生は、「愛は働く」、あるいは「愛は歩く」という表現をされました。テクテクテクテク、歩いて行って、救いを要する人を助けあげると言う「愛は歩く」とか、「愛は働く」とか言われた。テサロニケ書簡に、「愛の働き」という言葉が出てくる。それを先生は、「働く愛」というふうにつくり返された。

まあそんなふうなことで、クリスチャンというのは本当にキリストの生命を受けます。しかもこれは無条件で受けるんですから。全く無条件なんです。それを受けますと今度はそのキリストの愛を受けるということはキリストの靈が内に宿つてくださることです——その靈はじつとしておられない。その靈は天界と縁が結ばれていますから、絶えず祈



る霊である。それから、働く霊なんです。そういう形で広がって行く。

ところが、あの仏教の方は——私の誤解かもしれないけれども——禅というのは超然と悟って、「何がきても私は揺るがない」という。

「心頭滅却すれば火もまた涼し」

というが、私なんかちつとも火は涼しくない。熱いですし(笑)、お腹もへりますし。何か禅宗の方の悟りというのは、本当にすべてに超越して、自分は悟りきつて「法身」となるんでしようけれども、能動的な角度がやや薄いのではないかということを思ったりします。けれども、仏教の「大慈大悲」とかは働く愛となつて動くわけです。

今日取り上げます文章は、「これが本当の究極だ」ということを言っておられる。私は本当にもう「アーメン、ハレルヤー!」です。これは凄く熱がこもつた先生の叫びですよ。

先程の講演会から、話が広がってきたんですけども、私たちは本当にタンポポの種みたいなものでして、種が蒔かれて飛んでいく。そしてそこでまた芽が出ていく。あの講演会で蒔かれた種がタンポポのごとく、いろんな教会にまた全国各地に飛んでいくことを願っています。

●放送大学のように

それから、もう一つ私が感じていますのは、京都の集会はこんなにたくさんではない。10人くらいであったり、時には5〜6人であったり、とても今は寂しい状況なんです。でも、集まってくる人の質はすごい。質は凄いことが起こっているけれども、現実に集まれる人は本当に限られている。その時の録音テープが全国に回るんです。それも全員に回せば20数本作らなければならぬというので、組みに分けて3〜4人をグループにしてテープが回るようにする。ダビングしたい人は自由にしなさいということで、いくつかの組みに分けて、ダビングして全国に回るようになっていく。それから、どうしても病のために来れない人とか、事情があつて欠席した方には、例外的にその欠席分を送るというようなことで、森兄弟姉妹がそれをやってくださっている。10本送っていると言う。定期的に送っている組みが多分5〜6本あるんですよ。それから臨時に送られる方をいれて10本くらい送っている。

それで私は思つたんです。私は放送大学の先生をしていました。幕張でビデオ放送大学を。聞いてくれるのはカメラマンとか、事務のスタッフの方がいろいろ指図するためにこっちを見てくれる。「もつと顔を上げろ」とか、人形がパツと出てくるんですね(笑)。そういうふうにしていろいろ指図がくるんですけども、そういう方々がいてくれて、聞く人はいないんですけれども、その方々にしゃべっています。そのビデオの放送が4年間のあいだ春と秋の前期・後期、都合8回同じビデオが流され、そしてそのビデオは各地の学習センターにちゃんと保存され、それから学期末にまた連続編でずっと決まった時間帯に毎日流れる



ということ、かなり全国に流れたんですね。そうしますと、
「私の京都の集会というのは放送大学ではないかと思えばいいのではないかなんて思った。」

この新宿集会は、人の思いから出たことではないと思います。私は月一回、これからも東京には寄せていただきますけれども、それをどのようにご利用なさるか、活用なさるか、それは皆さん側の問題であって、私はそれが放送大学であろうと、つまり5〜6人であろうと、たくさんの方であろうと、話すことは同じ質のことを、私の中の感動をただお伝えする。やはりそれは目と目を向かい合って、生まの声を聞いていただく——つまりライブということですね——それを味わっていただくのが一番嬉しいですけれども、事情があつてそうでない方はテープだとかいろんな形でそれを活かしていただく。そういうふうになっています。

私はつくづく思うんですけれども、今までの日本の——特に私もプロテスタント系の教会のことしか知りません。しかも、私は非常に熱心な教会に属していました——そういう所でのお話では、まずは教会へ来なければ、いや、キリストを信じなければ、その人は何をやっていても、それは全部、全否定される。

「信仰を持っていない人のやることはすべてダメです。信仰を持っている人のやることはすべていいんです。どんなに失敗であつてもいい」
「どんなに失敗であつてもいい」ということは、私もあのローマ書8章にありますように、

「すべてのことあい働きて善となる」

という、そういう御霊の執り成しの故に私は受け入れることができますけれども、それが何か客観的に善であるというふうに言うところは思ひ上がりです。

「主さまはどんなマイナスも引き受けて、それを善に変えてくださるからいいのだ」というふうには私は思いますけれども、反対の面で、

「信仰を持たない人のやっていることはすべてダメだ」

という、私もそういうふう——思い込みですね——自分で非常に苦しんだ。こつちから見たら、本当に拍手を送つてあげたいのが、

「あつ、そうだ。あの人は信仰がないから全部ダメなんだ」

と、凄く自分の中で苦しかった。そんなときに、パウロのピリピ書にきますと、

「およそ素晴らしいこと、およそ徳あること、およそ人に誉められるに価する

ものは全部受け入れなさい」

という、あのピリピ書でいふ心は広がったんですけれども、それでも基本的には

「信仰がなければ神に喜ばれない。信仰がなければすべてがダメだ」

と、そういうことが凄く染み込む。そうすると、家庭でもお母さんを捕まえては折伏^{しやくくわつ}する。向こうにはそう思える。



「信じないとダメだ。何をしてもダメなんだ」

と、みんな否定して「ダメなんだ」ということを言うから、母親と私との関係が、そういうキリストが出てくることによってギクシヤクする。親孝行な子なんだけれども、ことその問題に關してはということ、何か気まずいものが流れる。その他、お友だちとの関係でもすべてそういう形で、それで嫌われたら、

「それはキリストだつて迫害されたんだから、そんなことを嫌がつていたら、あんたはクリスチャンではないよ」

という形で言われましょ。そこが物凄く私にとつては長い間の苦しみでした。やはり、主のなさることは、我々の人間の判断をはるかに超えている。

まず小池先生が仰った言葉で、

「キリストのキの字も知らない人でも天国に入れますよ」

ということを言われた。それもまた私には、教会クリスチャンの時はショックだった。

「キリストのキの字も知らないで天国に入れる。キリスト教にどんなに熱心でも、キリストさまから『ちよつと待て！』と、拒絶されることもあるよ」

と言われた。それはあるかも知らんと思いました。「偽善なる何々」ということからすれば、それは「待て！」と言われても仕方がない。けれども、その逆の

「キリストのキの字も知らない人も天国に入りますよ」

ということを言われた時は、さすがに私もショックだった。けれども今になったら、

「いいことを言うじゃないの、小池先生は」

と思う。しかし、あれでだいふ先生は損したと思う。教会からは、

「あれは異端だ。洗礼もせんわ、聖餐もせんわ。キリストのキの字も知らんで天国へ行くなんて言うし、仏教の用語はじゃんじゃん使う。これは世に迎合しているのであつて、厳しいキリストの道ではない」

というふに、きつとそう思われたと思います。でも、私は今、嬉しいですね。この「新宗教改革」の所をお読みななればわかつていただけたと思えますけれども。

そういうことで、私は永い間、クリスチャンになったがゆえに、色眼鏡でもものを見ていたと思う。ところが、先生はキリストの所で本当に曇りなき目をいただいて、つまり私どころがなくなる、私心がなくなる、無者とされたその眼でもものを見ると、それは本当の姿が見えてくる。しかもそれは愛の眼差しまなざしですので、マイナスの奥にプラスまで見てしまう。そういうものを賜る。だから、先生は、

「限界を知りながら、善きものを引つ張りだす」

というようなことを仰った。それが誉め上手ほじょうずにも通ずる。

「今はあの子はここまでしか来てないけれども、潜在的には素晴らしいものがある。神さまの被造物なんだから素晴らしいものがある。それがきつと花咲くよ」



という形で励ましていくという、そういう愛の目が変わるんだと思う。単に冷たく科学者として物事を冷徹に見るといふものでなくて、私心なくあるがままの姿を見る、しかもその奥にある本ものの姿を見て、それを引つ張りだしていくという、そういうものが与えられる。そうすると本当の解き放たれた、広やかな心。そういう世界が本当の福音の世界だということはいよいよ私は確信をいただくに至っております。

それ故に迫害されるなら、いくらでも迫害されます。狭いクリスチャンで友人を失うよりは、本当にすべての人を受け入れて、そしてオーソドックスなキリスト教の方々から迫害される方がよっぽと私の性には合っていると、今は思うに至っております。

●万の事には期あり

「伝道の書」3章をちょっと開いてください。この言葉が非常に最近、私に迫るんです。これは私の胃潰瘍と関係があります。こないだ講演をやった時に、私は胃潰瘍だと言いました。あの時点ではまだ良性とも悪性とも何ともわからないと申しました。あのあと25日に結果ができて、

「全然悪いものは発見されなかった。普通の胃潰瘍で、一円玉位の穴が開いていますけれども、これは薬で治ります」

と。2か月位かかるそうですね、胃潰瘍が治まりますのに。それからまた徐々にお許しをいただいてランニングなんかを始めようと思っておりますけれども。

「お酒は一切飲むな。タバコが一番悪い、間接喫煙でも悪い」
つまり、外から流れてくる煙でも悪いそうです。その次がお酒だという。

「やはりお酒というのは傷口に当たると刺激が強すぎていけない。それからあとは食べ物としてはコーヒーとか香辛料とか、そういう刺激性のもの、それから固いもの、そういうものは止めてください。それからランニングはやめてください。歩く方は大いに歩いてください」

と言われるので、私は走る仲間が走る時はウォーキングをやっています。そういう生活をやっています、あの講演会の頃はまだ青白い顔だったかもしれないけれども、今はすごく体調も良くなっておりますし、ただ私のごとき健康人が思いもかけない胃潰瘍に、それも勤務が全部終って京都へ帰って、それから出たわけですね。そうやって2か月ほど待ったをかけられた。これから走り出そうと思っただのに待ったをかけられた。

それで私は考えた。そうすると、この伝道の書の3章で、
「神のなさることはすべて時にかなってうるわしい」

という言葉が出てくる。

「万の事務には時あり……、泣くに時あり笑うに時あり」

「健やかなるに時あり、病を得るに時あり」



と、こう思えば、私が思いもかけぬ胃潰瘍、しかも70歳にして初めて胃カメラなる嫌なものを体験したという、これも「万のことに時あり」、その一つであると思えばいいのではないかと思いました。ちよつと3章の所を拾い読みしますと、

「天が下の万の事には期あり万の事務には時あり²生まるるに時あり死ぬるに時あり植うるに時あり植えたる者を抜くに時あり……泣くに時あり笑うに時あり悲しむに時あり躍るに時あり」(伝道の書3・1〜4)

こう見てきますと、本当に我々の人生というものは、喜びあり悲しみあり、うれしい時あり辛い時あり、上り調子の時あり下り坂の時あり、躓きの時あり、失意の時あり、これはすべて大きな主さまの愛の中にいだかれてあって、すべてはプラスになっていく。ローマ書8章にありますように、

「²⁷また人の心を極めたもう者は御霊の念をも知りたもう。御霊は神の御意に^{かな}適いて^{とこな}聖徒のために執成し給えばなり。²⁸神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。」(口マ8・27〜28)

という。だから、この8章と伝道の書の3章が結びつきますと、私たちは大肯定の人生観をいただくことができる。

どんなマイナスのことも全部、主さまの深い深い御思いの中にいだかれてある。一切をプラスにしてください。すべて、神さまの世界では時があるという。

誰も自分で時期を定めて生まれてきた人はいない。誰も自分で息を止めて死ぬ人もいない。感ずることはあるでしょう。

「私はあともう短い。だから、皆を集めて、最後に言い残したいこと、言っておきたいことがある」

といて、語るだけを語って、スーッと息を引き取るという、そういう終りは間近に自覚されることはありますけれども。元気な時に自分の終りをいつなんて自覚することは人は思わない。これは常に神さまの御手の中にちゃんといだかれてある。しかも、神さまは全部それを自分のカレンダーにお書きになっているかも知れない。そういうふうにありますと、私たちは今までかなり自分で思い上がっていた。

「自分はいくつになつたらこれをして、いくつになつたらあれをして、やがてこうなつて……」

「あなた、そんなことを決める権利があるの?」
 と。それで、そういかなかつたら、ガクンときたりして、

「あいつは成功しているのに、俺はなんで?」

とかね。全部、自分が自分のご主人様で、自分の人生をコントロールできるといふ、思いついていたんですね。我々の命は神さまから授かり、神さまの御意に従って歩み、そし



てまた御許に帰っていくという、そういう人生なんです。それでは、すべて他律的に定められた奴隷かという、そうではない。

キリスト・イエスは最も自由人でした。キリスト・イエスにとってはあのモーセの律法すら問題ではなかった。モーセの律法というのは、人間が神さまの御思いを知ることができないから、そこでああいうふう、十誡という形で規範を示された。あれはかけらにすぎないんですね。しかもあの規範の奥にあるのは、小池先生が見抜かれたように、

「汝、殺すなかれ」

とは、

「お前は殺すことはしないよ、私はお前の神ではないか。私を神といだき、父と呼ぶお前が殺人などできっこないよ、私が守っているからね」

という愛の語りかけだということを小池先生は言っておられる。「隠れたる福音」という。それを、

「汝、殺すべからず」

となると、

「殺してはいけないんだ」

ということになって、しかも、キリストは

「心の中で人を憎む者は既に殺したるなり」

と言われたから、

「ああ、私は憎しみの心を持った。どうしよう」

と、萎縮効果をもたらして、いわゆる律法の世界に閉じ込めて、人間を不自由にして、人間は内的に死んでしまう。生命に満ちるべきその霊の律法が、人を死に導くことをパウロは発見して、あのローマ書7章で愕然がくぜんとしているところがあります。

それをもう一度、御霊の自由の世界に解放してください。キリストの十字架です。十字架は解放です。自分自身からの解放であり、律法からの解放です。本当に御霊の自由を与える突破口です。それを本気で受けとった人には必然的に御霊がくる。これも小池先生のいろんな著作の中、論文の中、解説の中に波状的に出てきます。

● 第一段階は根源現実(十字架・復活・聖霊)

それを私は、私流に受けとりますと、二段階があります、三段階説です(笑)。

第一段階は、根源界、根源現実という、その次元があります。これは主さまの十字架で、我々の罪も死も全部引き受けてくださったでしょ。我々の過去・現在・未来、全存在を根底から引き受けてくださったのが十字架です。これでもう完全に解放されています。神さまの次元では、神さまの側では、

「お前は完全に自由だよ、完全に罪無き者だよ」



と。ここに神さまの宣言がある。これが十字架です。そして、復活というあのキリストのお姿がある。

「お前たちはああいう姿になるんだよ」

という神さまの約束がある。それから今度は、キリストが四十日地上におられて、そして天に昇られる前に弟子たちに、

「一か所に集まってずっと祈り続ける」

ということをやった。十日間、彼らは祈っていました。その時にペンテコステが五十日目に起こりました。そういうふうには神さまの側では、この十字架、それから復活——これは霊体となってキリストが現象してこられた姿です——十字架で死は滅ぼされた。旧き我は死んだという、それをあの復活のお姿で、山上で変貌されたと同じ復活のお姿となって現れることによつて実証された。だから、十字架の贖いの必然的展開として、復活となって現れざるを得ない。そして、人々に

「これが本当の私の姿だよ」

ということを現された。それから、弟子たちに聖霊を注がれた。ペンテコステです。

こういうふうには、神さまの側では時間的順序を追って、十字架、復活、それから祈り待ち望む弟子たちに聖霊が注がれたという、この三段階で神さまの御意が具体的に地上に現された。しかし、これはその歴史的なプロセスとしては三段階を追って行きましたけれども、神さまの世界では、これは一つなんです。神さまの世界ではもう、十字架が本ものであるならば、そこで完全に贖われたんだから、そういう我々のところへ聖霊は来ざるを得ない。真空状態で放っておかれない。邪魔物が退いたあとには、必ず聖霊が来てくださる。むしろ、聖霊が臨むために、我々の旧いやつを掃除してくださった。

「さあ、掃除ができましたから、お入りください。準備ができました、どうぞお入りください」

というようなものです。その「準備ができました、どうぞお入りください」というのが十字架だった。その前にヨハネはみんなにバプテスマを施した。主さまに、

「あなたをお迎えする準備ができました。どうぞ、お出でください」

というのが洗礼のヨハネでした。そういうふうには、「準備ができました、どうぞお入りください」ということで、十字架で完全に贖ってくださったから、聖霊は

「さあ待っていました」

とばかりに、その瞬間に入ってください。これは一如なんです。一如なんです。

ですから、皆さんが気づくか気づかれないのいかにかわらず、神さまの側ではもう全部出来上がってしまった。ワンセットとして皆さんの前に

「もう出来上がってしまったよ」

と、差し出してくださっているのが神さまの恵みなんです。だから、本質的に皆さんはも



う贖われて——聖霊は中に入っておられるのか、外をウロウロしているのか、そんなことわかりません——私はもう中に入っておられると思う。神さまの方は終っているんです。

●第二段階は霊的自覚

こういう話を聞かれますね——もうそばまで来ておられるということにしておきましよう——聖霊は胸の扉をたたいている。パウロは、

「福音は聴くことから始まる。信ずるとは聴くことから始まる」

と言いました。聴くことは福音の言葉によつて始まる。パウロは

「十字架の言ことば」

と言いました。神さまの世界は言葉の世界でしょ。熱狂的にただ祈るといふのじゃなくて、神さまの世界は創世記だつて、

「光あれと仰れば、光があつた」

という。ヨハネ伝では、

「はじめ ことば太初に言ありき」

という。「言」という表現をされていますね、霊なるキリストのことを。この霊なるキリストが言をもつて万物をお創りになった。言をもつて働きかけられた。言を発すると同時に働いておられるわけです。単なる言ではない。言は働く行為となつて具体化して行っている。そういう言の神さまでですから、我々はその言を聴くことによつて、

「あつ、なるほど、そうだったんですか」

という。そこで、聴くということとは、自覚するということ、自分の意識にのぼるといふことです。我々は単なる物体ではありません。霊を持った霊的な人格です。霊的存在です。神さまも霊でいらつしやる。霊なる神さまが我々の霊に向かつて語りかけておられる。それを我々は言を通して聴くわけです。キリストを通して語りかけられる。弟子たちを通して、使徒パウロを通して語りかけられる。今度は今、神さまは私を通して——その前に小池先生を通して——語りかけておられる。その語りかけにピタッと波長が合った時に、

「はっ、そうだ」

と気づきますね。そして気づいて、その瞬間でもいいですし、今度は自分で、自分の部屋ででもいいです。とにかく、

「十字架がありがたくてしょうがない。本当にそうだ。十字架は本当にそうだった。

今まで耳で聞いていた、言葉で聞いていた。けれども、私は内的に聞きました。内的に見ました。十字架を味わいました。十字架が私の身体の中に入りました。

平伏しました。本当に涙しました、その時は」

と、そういう自覚は、聞くことから始まってだんだん深まります。

「本当にもう全身涙にむせびました」



という体験をします。これが本当の霊的自覚だと思えます。その時にその人の中に宿り給うという段階〔第二段階〕が次にくると思えます。その段階は、どなたにも本当に聞いて感動するということがその段階なんです。それが段々深まるでしょ。聞いて感動したという時にその人の中に入ってきたさつていいます。それが深まります。そしてある時、特別集会とか、あるいは一人で祈っている時に、あのペンテコステのようにまたもう一回ウワツとくることがある。これは「くることがある」とだけ申し上げます。私はないですから(笑)。

●第三段階は聖霊体験

小池先生には物凄くきた。先生はそれまで無自覚だった。本当は自覚しておられたんでしようけれども、無教会の世界に育てられて、あまりそういう角度で話を聞いておられないから。呻きながら無自覚でいらつしやつたのが、あの阿蘇の祈りの中でバーツと出られて、「これが聖霊のバプテスマだ!」

と。これが第三段階なんです。第一段階から第三段階へ一気にきてしまったんです。小池先生は。それまではくすぶっていた。自分であまり自覚なさらないで、くすぶっていた。くすぶっていた証拠に、その1950年以前に書かれたものだって素晴らしいです。やや理屈っぽいだけであつて、理屈っぽいけれども素晴らしい。それはくすぶっているから素晴らしいです。

あの聖霊のバプテスマを体験された。いわゆる先生が言う聖霊体験として。この聖霊体験で先生は、

「これが聖霊のバプテスマだ。これを経験しないと本当のクリスチャンでない」というようなことを言い出された。それはやや先生の勇み足だった。勇み足です。

「では、それを体験しない者は全然ダメなの?」

ということになりますから。先生は自分の苦しい経験から、無教会において育てられ、そして呻きながら、誰も道を示してくれない。孤軍奮闘というか、孤軍で苦しむ。そして、バーツとそれが来たものだから、この神さまの側の根源現実〔第一段階〕と、それから第三段階の聖霊体験が直結した。

私はそういう先生のお話を聞き、

「私は、聖霊のこんな体験はいつ下さるんですか? 次の特別集会ですか? またダメなら、また次まで待つんですか? いつまで待てばよろしいんですか?」

と、これをやっていたら、先生は

「お前はもう受けているよ、受けている。受けていなければ、お前のような話ではきかないよ」

と、こう仰る。だから、無自覚的感染者です(笑)。それで、

「そうなのかなあ」



と。それでも、先生のものを読むと相変わらずこれでしょ。「困ったなあ」と思っていた。そこで、私の体験的な説は、この真中〔第一と第三の間〕にこれを持ってきてみたい。これなら、私も経験があります。本当に経験がある。一度だけではありません。何度も何度も本当に十字架が迫ってきますよ。本当に十字架を一番初めて触れて体験した時には、本当に涙に咽び、もう何か自分がどこかへ、古い自分が消えたような感じを受けました。そして、「今まで何を悩んでいたの？ あの囚われた自分はどこへ行ったの？」

と、すべてがすがすがしいという、そういう思いをいたしました。けれども、体は痺れもしませんし、異言も出て参りませんし、ただ感激の涙に咽んでいたというのが事実です。そういうこれは実感ですね。「涙が出てくる」というのはその始まりですから。

大の大人がこの福音の話聞いて泣くというのは、これはいわゆる他のことで、子供を失って泣くとか、苦しめて泣くとか、そんなこととは違う涙ですから。感激の涙、喜びの涙、これは聖霊の働きの他の何ものでもありません。そういう段階が第二段階です。

そして次に、人によつては第三段階を味わう人もおるし、これはもう味わう必要がなくて、そのまま行ってしまう人もある。私はそういうふうには今は受けとっています。

ですから、どうぞ、この第二段階、これは必ず通っていただきたいんです。我々は生ま

「そうだった！」

ということをおもわないと、確信を持ってはいけません。先生がどんなことを言ってくださつても、それはまだ文字の世界であつて、自分の中に結びつくには、やっぱり自分がその世界を一身に味わわないと、できません。

私はいつもレストランに入る時に、陳列棚を見ていて「あれを食べたいな」と思つて、注文して出てきたら、「なんだ見すばらしいな」というようなことがあるんですけれども、その出ているのを自分で味わつたら、

「うん、あそこのはうまい、絶対うまいよ。よそとちがうよ」

ということを確認をもつて言えますね。それまでは、「と人は言いますけれども」とか、「と書いてありますけれども」とか、すべて「と言われています」とか、それが付くんです。

「うん、絶対にうまいよ。私は保証するよ」

とか、それがその第二段階だと思ふんです。そして先生のように、

「そうだ、そうだ」

ということ、聖書を読んでも「そうだ、そうだ」と、そういうふうな相槌が打てるという、ここはぜひ通っていただきたいと思う。

それから伝道の書3章11節に、

「神の為したもうところは皆その時に適いて美麗しかり 神はまた人の心に永遠をおもふの思念を賦けたまへり」



これも素晴らしいですね。

然されば人は神のなしたもう作わざ為はじめを始はじり終おわりまで知あきり明あむることを得えざるなり」

(伝道の書3・11)

神さまのなさることは人の思いをはるかに超えている。それを全部究め尽くそうなんて、そんな思い上がったことを思ってはダメ。それからまた、自分自身のことを何でもわかっているとか、自分が自分で計画を立ててその通りやれるなんて、そんなことを思ってはダメだと。そこは委ゆたねて、信じて、すべてのことに時があると。どんな体験も、キリストに在って体験していく。聖霊がいてくだされば、すべてプラスに変えられていく。過去を振り返ると、悔やんでも悔やみきれないことが、皆さんあるはずです。私もあります。

「あの時ああしておけばよかった。あの時は智慧が足りなかった。浅はかだった」

と、何度悔やんでも戻らない。しかし、それを「いいじゃないの」というのは、

「忘却すればいいじゃないの」

ですね。忘れられない。その時に「いいじゃないの」と言わしめるのは、

「万よろずのことに時あり」

と。失敗するにも時あり。そして、万事を益にしてください、そういうお方がいてくださる。主さまが過去のことも全部引き受けてくださっている。

「あなたはもう思い煩わなくてもいい。あなたは私の僕しもべとなつて、あなたの道を行

け。未来へ向かって進め。振り返つてクヨクヨするな」

と、その後押しがなければ進めません、本当のところね。まあそんなことを思います。

●『無の神学』第十三章 「新宗教改革」

今日は『無の神学』の「第十三章 新宗教改革」という所。これは171頁から210頁まで40頁あるんですよ。すごく中身が濃い。それでできるだけカットできる所はカットしたいと思いつつも、「ここも欲しい、あそこも欲しい」というようなことで、カットできないんですけれども、それでも敢えてカットできる所はカットします。

まず、121頁の所に、「(一) 宗教改革とは何か——歴史的回顧」とあります。宗教改革というのは、言葉からいっても、どんな宗教でもあります。それが本来の姿を見失っている時に、

「本来の姿に帰れ」

という。新しいものを作り出すということもあるでしょうけれども、おそらく宗教改革というのは、本来のものを回復しようという動きだと思います。キリスト教に限りません。大本教だとか、天理教だとか、いろんなものがありますね。それもその道を拓ひらかれた方は素晴らしかったと思う。それは絶対、人から出てないから。上からの啓示を受けて、いわば洗礼を受けて圧倒されて、自分が本当に道具となつて、上からきた啓示を語らされた



思う。ところが、それは初代の方においてはそうだったけれども、もう二代目、三代目になると、これは言葉となつて受け継がれていく。そうすると、そのうちに魂が失われる。そうすると形骸化する。寺院ができ、だんだん組織ができて大きくなっていく。そこにズレが出てくる。組織を守つていくためにどうするかという人為的なものがどんどん加わつていく。初めに始められた方は裸一貫ですよ、おそらく。裸一貫で始めたその本来のものが、後に大きくなると失われてしまう。これは仏教だつてそうでしょ。鎌倉仏教のあの法然、親鸞、あるいは日蓮、そういう人たちはみな命懸けです。お金なんか持っていないよ。そういう形で身を削つて、

「命を失つてもいい、道のためには、真理のためには」

と思つて開いていったものが、だんだん組織化されていきますと、もう魂を失う。その中から本来の始祖の姿に帰れという、そういう復興運動、元に戻ろうという、それがほぼ共通の宗教改革だと思つて。

それからもう一つありますのは、これは改革というよりも、発展といった方がいい。旧約の世界から更に新約の世界へというふうに、新たな展開ということ。これは明らかにあります。けれども、キリスト教の場合は、新たな展開でありながら、キリストはアブラハムと共にいました方。つまり、隠れていた者が現れただけであつて、今までは神さまの啓示は徐々に徐々に進化していったのが、キリストにおいて完全に現れた。今度はキリスト以降になりますと、

「キリストの世界へ帰ろう、初代の教会の姿へ帰ろう」

と、そういう形で改革は起こりました。だから、おおよそそういうものを持っているというふうにお考えいただきたい。

●(一) 宗教改革とは何か——歴史的回顧

そこで歴史的回顧の所をみますと、ここで取り上げておられるのは、エリヤ、ヨシア王、エレミヤ、エゼキエル、第二イザヤ、ヨエルという方々をごく短く取り上げておられる。まず、エリヤは172頁の所。

《エリヤ

……エリヤの祈りはこうであつた、

「アブラハム、イサク、イスラエルの神エホバよ、汝のイスラエルにおいて神なること及び我が汝の僕にして汝の言に従いてこれらのすべてのことをなせることを今日知らしめ給え。エホバよ我に応え給え、我に応えたまえ、この民をして汝エホバは神なること及び汝は彼らの心を翻えし給うということを知らしめ給え」(列王上18・36〜37)

と。この祈りに対してエホバは火を降して燔祭と薪と石と塵を焚き尽くし、溝の水を



洩らすという実力を以て応えた。民衆はこれを見て平伏して、

「エホバは神なり、エホバは神なり」(18・38〜39)

と叫んだ。》

ここで著しいことは、人の心を引っくり返すのは神の業だ、神の実力ある働きだ、霊の力だ。そういうことを先生は言っておられます。だから、改革するというのは

「本来の姿に帰れ」

ということですけど、それは人間が気づいて、いくら叫ぶだけではダメなので、そこに神の力が共に働いてくれなければ、人の心はひっくり返らない。エリヤにおいてはそれが伴った。エリヤが祈りますと、火が天からふってきた。

前の第八章「旧約聖書における無の諸相」の「エリヤ」の所、山頁に出てきておりますが、そこをみますと、

《エリヤの祈りは全く棄身の祈り入りであった。火は燔祭と薪に降るより前に、エリ

ヤ自身に霊火が降ったのである。》

これは小池先生の独特な捉え方です。私たちは、あの薪の所に火がふつてきて、エリヤはその外にあつたと思つていますが、先生は、

「エリヤの中にまず火がふつてきた。エリヤは火の海となった。内的に霊的に。そして同時に薪や水に火がふつてきて、そして全部焼き尽くした」

と、こういう捉え方をしておられます。

エリヤ自身に霊火が降ったのである。その霊火が燔祭に燃え移ったのである。その霊的現実にはエホバとエリヤが一如の現実なのである。エリヤは即ち無者となって、エホ

バが裏に来り給った、という現実である。》

これは、私たちが伝道をします時に、先ずキリストの火が、聖霊という火が我々の中にくる。私たちは聖霊においてキリストと一つにされる。その私たちの火が人々に伝わっていく。愛が伝わっていく。そういう姿だと言つていいでしょうね。その時のエリヤは無者である。霊火によつてもう内が燃やされて、無者とされている。その無者とされたエリヤの中に宿った火が、薪に移つて水を洩らしたという、そういう捉え方です。

これは誰も現場を見ませんから、それぞれの方の解釈の仕方でしょう。でも、私は先生のこの捉え方は凄いなと思いました。こんな捉え方はなかなかできません。でも「然りアーメン」と思います。だから、先生は旧約の事象でありましても、旧約の出来事であっても、それを聖霊の光で読んでしまわれるから、旧約の世界以上のことを告白してしまうという、そういう感じがいたします。

元へ戻つて、172頁。

《パウロが「福音は言に非ず、力なり」といったが、実に本当の宗教は霊の力にその本質がある。生命的な力に触れて、心も翻るのである。単なる宗教思想で回心は起きない。》



「福音は言に非ず、力なり」とは、実は言も霊言で力をもっているので、「福音は力ある言なり」という意もふくんでいる言である。キリストが「わが言は霊なり、生命なり」といったのも、「わが言は霊言なり、生命を与える力ある言なり」ということである。

宗教改革の本質が既にあきらかにエリヤ（エホバはわが神なり）の意に於て現われた、実証された。

ヨシヤ王

時代はずっと降って起^二元前7世紀の後半……大祭司ヒルキヤが、神殿修理の折に「律法の書」を発見した。それは申命記法、愛の律法であった。その頃また偶像礼拝が所謂「高き所」で旺^{さかん}に行われていたのでヨシヤ王は、南ユダ国ばかりでなく、北朝イスラエルにまで手を伸ばして偶像禁止の改革を徹底的に行った。しかしヨシヤの宗教改革は、礼拝の対象の変革即ちエホバ信仰の復興であった。要するにエホバへの立ち帰りである。》

この申命記法典とかけ離れている。そこでヨシヤ王は急いで宗教改革を、制度改革をやった。北イスラエルと南ユダの双方に宗教改革を実行しました。しかも、その具体化といえますのは、先ず偶像崇拜を絶対禁止した。向こうの当時の偶像崇拜というのは非常に淫^{みだ}なものであった。「高き所で行われている」と書いてますが、何か性的なことが営まれていたという、性的な頹廢と宗教的な礼拝が一つになっていたようです。それを全部禁止して、徹底的な改革をした。しかしながら、そのヨシヤの宗教改革は、礼拝の対象の偶像から、神エホバという外側から改革を強行していったというものであった。

● エレミヤ

それを内面化したのがエレミヤだということで、次にエレミヤが出てきます。また前の「第十章 帰入・回帰」の所の129頁以下にエレミヤのことが詳しく出てきます。また後ほどそこを見てください。今はこちらの173頁からの所を辿ってみたいと思います。エレミヤは外側の律法、いわゆる律法を内面化した。「心の中に書き記す^{しる}」ということをやったわけです。

《エレミヤ

その内面的な改革を成し遂げたのはエレミヤであった。……しかしこの度は

「わが律法を彼らの衷^{こころ}におき、その心の上に録^{しる}さん。我は彼らの神となり、彼らはわが民となるべし。……そは小より大に至るまでことごとく我を知るべければなり。我彼らの不義を赦し、その罪をまた思わざるべし」(エレミヤ

31・33～34)

律法がパウロの謂う「律法の義」の角度で遵^{まも}られている限り、そこには愛の契約たる人格的な「知る」の心境には来ない。それを愛の心の交りへ深め、愛を破った不義を赦し、その罪を忘却の谷へ棄ててしまふ、というエレミヤへの啓示、福音の預言的



宣告であった。悲劇的家庭生活を通して神の愛を身証した預言者ホセアは、このエレミヤの消息の先駆者であったが、エレミヤは南王国ユダの滅亡を眼前にしながら、愛、新契約を心の中に刻み込む改革を告知した。

さきにも触れたように、もともとエホバのモーセへの律法の根本精神は隠れたる福音であって、神のイスラエルの民へのあわれみに発したもので、深い心の顧みに発したものであったから、エレミヤの「新しき契約」といつても、今までになかったというのではない。

ここから先生はしきりに、「ネオス」(neos)と「カイノス」(kainos)と云うことを言う。「ネオス」は「ニュー」(new)ということですね。我々のこの地上の世界では「ニュー」「ネオス」しかないわけです。いろんな品種が開発されたり、機械でも自動車でも新型が発明されたり、とにかく人は次から次へと新しい物を作りだして、それを流行にもってきて、生産して売り出していくというのが、我々の世界です。それをやっていないとまた経済が沈滞するということから困ったものだと思う。私は経済のことはわからなくて悩むけれども。必要なものがあつたらそれでいいのに、何で次から次へと作りだしていくのか。活性化してみなが繁栄していくのが経済であつて、昔みたいに物を大事にしているのは、日本の経済は沈滞する。だから、絶えず「ネオス」ということをやっている。この「ネオス」というのは、「ニュー」ということで、本質的には古びゆくもの。だから、常に新型を発明してゆく。この新しい物もまた古くなりますから、また次に新しい物をと。こういうものが「ネオス」「新しい」ということです。

それに対して、神さまの世界の「新しい」というのは「カイノス」という、これは古びゆかない。古びないということは「永遠」ということです。永遠の質を持っている。しかも、この「カイノス」は初めに、神さまの世界の初めに、そこからもう既に在ったという。

「今いまし、昔いまし、後きたり給うお方」

というふうに、キリストは天地の創られる前から神と共に在いました。それがやがて形をとって現れられた。そして、あの黙示録の世界でキリストの御姿が見えています。そういうふうに、初めから在った。それが顕現してくる。あるとき現れてくる。けれども、現れた時初めてそこに在るのではなくて、元から在ったよという。本質があつた、それが隠されていた。隠されていたのであつて、決して突然現れたのではない。しかし、人間の目には

「あつ、新しい」

と見える。だから、人間の自覚としては、体験としては「ニュー」なんですけれども、神さまの世界では、

「これは実は元から在ったんだよ。それが今、この時に現れたただけだ。本質が今、現れただけで、その意味では永遠なんだ。そしてそれは古びない」

と。ところが、人間の自覚においては、そんなに新しいものと思つて驚き怪しみ喜んだのに、



すぐにそれが人間の意識では風化してしまつて、固定化して形式化して忘れられてしまう。もう一度その本来の新しかつたものを回復しようというのが改革だつたわけです。だから、改革は

「本来の姿に還れ^{かえ}」

という動きとなつて現れてくる。それは決して本質的に新しい永遠なるものが古びたのではない。人間の意識の中で古びたにすぎない。人間の方が間違つていたのであつて、にぶつていたのであつて、それをもう一度呼びさます。それが結局、「ニュー」だという。

「絶えず目覚めて祈つていなさい。それだよ」

と。人間というのは悲しいもので、どんな嬉しいことも、やつぱり感激が薄れてゆく。それは悲しみも薄れるから。悲しみを癒すのは時が経つしかしようがない。それと同じように、感激も喜びも時間がたつと風化するんですね。それを風化させないで、

「絶えず新たに」

というのが我々の祈りです。二千年前の十字架が今も目の前に迫つてくる。今も新たである。主さまはいつも迫つてきてくださつていらっしゃるお方である。その中で「常に現在」という、これを保証してくださるが御霊なんです。この御霊という、このお方が私たちをして絶えず十字架を現在のものとして自覚させる。主さまの愛をもろに受ける。そして将来の我々の黙示録的世界を現在に引き寄せて、それを望みとして生きていく力を与えてくださる。その御霊がこれをついにいつもしてくさる。「カインス」を保証してくださるのは御霊以外にないんです。だから、小池先生があれだけ、

「聖霊、聖霊、聖霊！ み霊^{たま}、み霊、み霊！」

と言われるその意味が、意図が、気持ちがこれでわかるんです。

我々の肉なる人間、生まれながらの「ナチュラル パーソン」(natural person)というやつは、本当にこれはもうそれでない生きていけないから、生物体としては。だから、生物体として生きていくにはよく出来ているんですよ。でも、

「永遠を思う思念^{おもひ}を授けられた」

という。我々は矛盾構造でしょ。一方では過ぎゆく世界に、「ニュー」の世界に生きていながら、他方では永遠なるものを慕うという、相反するものを授けられている。しかも、永遠なる思いがだんだん日増しに強くなる。それを満たしてくださるものは御霊なんです。御霊がああ永遠界のものを地上界に引きずりおろして来て、私たちの中に植えつけて、

「さあ、これから一緒に行こうよ」

という。これで分裂しないで行けるんですね。

単なる哲学の世界だつたら、それは憧れ^{あこが}だけで終るかもしれない。思われたる世界かもしれない。「イデア」(idea)理念、観念の世界かもしれない。現実化しないんです。でも、御霊はあの永遠なるものを我々の永遠ならざるものの中にぶち込んで、



「永遠とあなたは一つだよ、あなたは永遠者だよ」と言ってくたさるから、

「ありがとうございます。これは望外の喜びです。こんなものをただで頂いてよろしいんですか」

ということなんです。それで、小池先生の文章に戻りますと、

《……エレミヤの「新しき契約」といっても、今までになかったというのではない。この「新」は古びゆくものに対する「新」ネオスではなく、不変の「新」カイノスである。「新しさ」の内実は不変である。その本質に立ち帰ること、不変なる無量の内実をもつものの「新」発現なのである。宗教改革とは、カイノス的な折に触れて新たに根源に立ち帰ること、根源の新たな発現ということである。

それがルターとか、そういう本当^にに心ある方を通して現れてくる。だから、周りの人からみたら、「珍しい、ニューだ」というふう^にに映るけれども、神さまの側からみたら、

「今まで埋もられてきたものを再発見してくださっている」という、そういう面があるんだというわけです。

そしてエホバのこの本願の愛が爆発した言がある、

「見よわれわが震怒と憤恨と大なる怒をもて彼らを逐いやりし諸々の国より彼らを集め、この処に導き帰りて、平安に居らしめん。彼らはわが民となり、我は彼らの神とならん。われ彼らに、「の心と、の道をあたえて、

これは永遠のものですな。

常に我を畏れしめん。……われ彼らを棄てずして恩恵を施すべしという永遠の契約(ベリト・オーラム)をかれらに立て、我を畏るるの畏れを彼らの心におきて我を離れざらしめん。」

全部、神さまの業だ、神さまがなさるものだよと。

われ悦びて彼らに恩恵を施し、心を尽くして、誠に彼らをこの地に植うべし」(エレミヤ32・37〜41)

イエスは、「戒めの中で何が一番大事ですか？」と聞かれた所で、

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、汝の主たる神を愛すべし。己の如く汝の隣を愛すべし」

と、この二つを引かれました。

「その『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、汝の神を愛すべし』というのは、実は神さまがその思いでお前を愛してくださっている、そっちが先だよ」

ということを先生は言われたことがありました。

「我々にただ『心を尽くし何々しろ』と要求なさっているのではない。実は神さまの側がそれだけの全心全愛、熱心をもつてあなた方一人ひとりを愛し、つかみか

かっているのだから、それに応えてあなた方もそうせざるを得ないねということ。戒めではない。そうあらざるを得ないという本質、これが「カイノス」ということ、それを告白されただけだ。キリストはそういう世界に生きておられたから、神さまの愛を猛烈に受けとられた。全身、父なる神の愛に貫かれておられた」

だから、そういうことがスツと出てくるわけですね。

《これは圧倒的な本願愛の言である。親鸞の「歎異抄」の弥陀の劫力愛と相照応する言葉である。》念仏は無碍むげの「一道」であるが、エホバの道は一心一道であり、エホバ自らの全心全魂の恩恵道である。そこに「永遠の契約」が神の一方的な圧倒的な愛によって結ばれる。民はその心をつねに新たに立ち帰らしめられて離れることができない。宗教改革とは、不変の根源愛に新たに立ち帰ることのほか何ものでもない。

これですね、

「宗教改革とは不変の根源愛に新たに立ち帰ること」

全ては神の業。人から出ない。これの自覚が本当に重要です。そしてまた、人間は楽になります。自分が立派になろうとする必要はない。神さまに大いに働いてもらったらいい。むしろ、妨げている自分に気づけばいい。自分が神さまの愛を今まで妨げていたんだと。それが「わが思い」の思い込みだったんです。

「私なんかダメだ。私なんか何も取柄とりえがない。私はなんぼ気張ったって、神さまに喜んでももらえるような存在ではない」

とか、自分で自分を決めつけて、そして神さまの方の根源愛が迫ってきているのをシャットアウトしていた。そのシャットアウトしていたことに気づいて、パツと心の扉を開いたら、サーツと光が入ってきて、もう闇は消えたという。

「もう十字架で既に片づいていたのではないの？」

と、それに気づくことですね。そしたら無責任なんです、極まる場所は。「無責任」というのはちよつと恐いですよ(笑)、

「本当に無責任でいいの？ やつぱり自分が何かしなければ」

という。それはあるけれども、本質的には無責任なんです。その無責任を本当に自覚したら、物凄く責任ある態度をとるんです、この世では。そういう逆説なんですよ。正直に、

「私は無責任だ」

と言ったら、

「そんな無責任なやつは雇えるかいな」

と言って、「雇ってもらえないけれども。本当に自分に無責任で、

「いや、私は無責任だけれども、私に付いている方は物凄く責任とつてくださいる方ですよ。あんた、そんなことは知らんでしょうが」

と。こういうような無責任なんです。だから、その人は現実的にはこの世では物凄く責



任ある行き方をして、物凄く働きます。そういう逆説なんですね。だから、平面で考えたら、ちよつとまずいことになります。

宗教改革とは、不変の根源愛に新たに立ち帰ることのほか何ものでもない。これが真の前進となる。

「立ち帰ることが前進だよ」と、小池先生はよく仰ったですね。

「立ち帰ることが前進なんだよ。躓いたと思つたら、転んだと思つたら、立ち帰りなさい。そこからまた新たな前進が始まるから」

と。「そんなことやつたら、ちつとも前に進まない」と、普通は言いますね。けれども、進むんです。ここまで進んで立ち帰ります。次はもうその次まで行く。また立ち帰る。それからまたもつと先まで行く、とこういう世界ですから。

ということは立ち帰る現時点では、即時、即場の新現象が展開して往くからである。現象面の「新」にはネオスのものがあらわれるが、そのネオスは特殊性、一回性をもっている。

ルターの宗教改革も一回性を持っていました。しかしながら、

がその特殊性、一回性の奥にこれと不可離の融合を以てカインの特殊な「新」がある。

カインの特殊な「新」がそこに必ずあるんだと。だから、現れ方は特殊だけれども、本質は絶えず本ものが現れてきているだけだ。その本ものは神さまの原始の世界から、初めの世界からずうつと繋がっているんだと。

宗教改革とは、それゆえ厳密にいうなら、ネオスの「新」の面をもつたカイン的「新」の発現である。》

現象的には「ああ新しいな」という面を持った、しかし、本質的にはカイン的な新、それが現れてきた。そういうことに他ならない。よく、

「原点に立ち帰ろう」

と言いますね、原点に戻ろうと。戻った時にはもう一度深められて、以前の自分よりも更に飛躍をとげて、そこからスタートする。そういうことですね。

●エゼキエル

それから次はエゼキエル。エレミヤは心の世界でした。エゼキエルは霊の世界で、直接的に語りかけております。

《エゼキエル》

エゼキエルがまたエレミヤのあとを受けて、新しき啓示を受けた。

「我れ彼らに唯一の心を与え、新しき霊を汝らの衷に賦けん、我かれらの身の中より石の心を取りさりて肉の心を与えん。……彼らはわが民となり、我はかれらの神とならん」(エゼキエル11・19～20)



ここに「新しき霊」(ルーアハ・ハダーシャー)という新表現が出て来た。エレミヤが深い心の預言者であるに対し、エゼキエルは神秘的傾向の霊的預言者である。「石の心」(レーブ・ハーエベン)とはかたくなな心、砕けない心である。「肉の心」(レーブ・バール)はあたたかい柔軟心のことである。活き活きとした霊と柔軟心、この両面あるとき人間は本当の霊止となる。

私たちは霊を自覚することはできません、残念ながら。でも、心は自覚できます。だから、心は柔らかい人、心は温かい人、心は大きい人、そういうことは感ずることができません。そういう心をつくりだしてくれるのが新しき霊なんだという。御霊という愛の霊、執り成しの霊、思いやりの霊、それが私たちの心を豊かにしてくれる。それからまた、御霊という霊は「真理の霊」とも言われます。あらゆる本ものを究めて、そして我々に開示してくださる、真理の霊です。

何か「宗教」といいますと、いわゆる真理の世界とか、そういうった全うな世界からズレた、やや偏った世界にのめりこむというふうに誤解している人が多いですね。オカルト宗教やその他いろいろ熱狂的な宗教というのは何か非常識なところがあって、いわゆる健全な人間性に反することを追い求めている。

「だから、宗教は怖いよ」

ということが一般には言われる。でも、福音はそうじゃありません。福音ほど全うな人間を育てるものはない。それが、キリスト教が全うな人間をつくってないとしたら、そこに何か欠陥がある。受けとり方に、宗教的に硬化して、組織に固まっているとか、ひとつの儀式にこだわっているとか。

「聖餐式はこうでなければいけない。洗礼はこういう洗礼でなければいけない。礼

拝の形式はこうでなければいけない」

とか。何かそういうったものにこだわって、本ものが死んでいるんですね。窒息している。だから、形はあっていいんです、洋風があってもいいし、和風があってもいい。洋食があってもいいし、和食があってもいい。日本人なんては得意ですね、洋服は着るわ、和服は着るわ、洋間があるわ、和室があるわ、実にいろいろな中に飛び込みますからね。そういうふうな柔軟なんです。

けれども、大事なものは、その家庭の中の愛でしょ。その家庭に愛があることでしょ。そういうことで様式はどうでもいいんだけれども、本当のものをそこにもたらすものは、その根源は御霊だということですよ。

活き活きとした霊と柔軟心、この両面あるとき人間は本当の霊止となる。エゼキエルは更に次のような啓示にあずかった、

「汝らその行いし諸々の罪を棄て、去り、新しき心と新しき霊を起こすべし。イスラエルの家よ、汝ら何ぞ死ぬべけんや、我は死者の死を好まざるなり、然



れば汝ら立ち帰りて生きよ、主エホバこれを言う」(エゼ18・31〜32)
 神さまは活かす神さまです。生命を与える神さまです。死を決して望み給わない。そういうお方だということがここに出ています。

「新しき心」と「新しき霊」を賜って「立ち帰れ」、そつすれば「生きる」、と神の力強い言である。神は「死者の死を好まない」との著しい言である。エゼキエル書第37章の有名な「枯骨の復活」に通ずる言である。個人及び民族の復活への預言で、その焦点は単に「心」ではなく「霊」的新生である。同じ消息が36章26、27節で告げられている。

「わが霊を汝らの裏に置く」(エゼ36・27)

という著しい言が出てくる。神霊の内住は、新約のペンテコステの「聖霊降臨」への預言である。》

●第三イザヤ

それからその次は第三イザヤが出てきますが、この第三イザヤというのはイザヤ書の55章からあとのことで、非常に福音的な内容を含んでいます。そこに出てくる著しい言葉として、

《第三イザヤ

これが第三イザヤとなると、

「エホバ言いたまわく、汝の上にあるわが霊、汝の口に置きたるわが言は、今より後、永遠に汝の口より、汝の裔すえの口より、汝の裔すえの裔の口より離れざるべし、わが彼らに立つる契約はこれなり、と。こはエホバのみ言ことばなり」(イザ

ヤ59・21)

ここに霊と言、これが対をなしているということに気づいてくださいということなんです。霊と言。パウロの言葉にも、

「それ人は心に信じて義とせられ、口に言いあらわして救われるなり。」(ロマ

10・10)

という言葉があります。そして、

「言は近ことばきにあり」

ということが言われている所が新約聖書にあります。

神の霊にして、神の言。内なるは神の霊、外なるは神の言、霊と言とは不可離である。

また霊は発しては霊言となり、動いては霊行となる、

そういうふうには、「源は一つなんだ」ということをここで仰っています。

力ある奇蹟的な行も霊の発動である。全部生ける霊法の発現である。そのことはパウロがロマ書8章2節で「生命のみ霊の法」といつている通りである。》



●ヨエル

その次は「ヨエル」。ヨエルはペンテコステの所に出てきます。使徒行伝の所で「ヨエルの預言が成就した」ということをペテロは民に語り聞かせます。

《ヨエル

「心を裂いて神エホバに帰るべし」との預言を賜ったヨエルは、更に決定的な預言を賜った、

「その後われわが霊を、一切の人に注がん、汝らの男子、女子は預言せん。汝らの老人は夢を見、汝らの若人は異象を見ん。その日われまたわが霊を僕婢に注がん、……すべてエホバの名を呼ぶ者は救わるべし」(ヨエル2・28、29、32)

この預言がペンテコステの日に実現した。「わが霊」はキリストの霊として降臨した。キリストの十字架の贖罪を経てはじめてこの霊、聖霊は来臨したのである。

いわば括めが次の178頁に出てきます。

預言者はすべて、何らかの意味で改革者である。改革者の改革は、新たに無限無量の根源なる神へ立ち帰ることである。改革は即時即場において新らしき現象の発現となる。その発現面はネオス的新であるが、その根源面はカイノス的新である。宗教改革はかくて折にふれ場所に応じて、新たに現われてゆく。》

ここまでが今までの括めです。

●キリスト・イエス

それから「キリスト・イエス」。これはもう凄い大改革者、源なるお方です。

《キリスト・イエス

アブラハム、モーセ、ダビデ、すべての預言者を包括総合し、且つそれを超越している超包者はキリスト・イエスである。「我はアブラハムより前に在りしなり」という永遠の実存者である。彼だけが本当に神を現じた。神という根源者の根源相を自現した新人、「旧の下に新たなものなし」といったコーヘレスの言を破った新人がイエスである。この「新」はいかなるものより「旧」きものであった。旧にして新、新にして旧なるものがキリストである。「今在まし、昔在まし、後来たり給う者」と黙示録で表現されている所以である。彼こそは永遠の新そのものである。

「時(ホ・カイロス)は満てり、神の国は近づけり、

汝ら回帰して(メタノエイテ)福音に信じ入れよ！」(私訳)(マルコ1・15)

この「回帰して」というのは、ルターがここを引いて、

「これをキリストが語られた時に、キリスト者の全生涯が悔い改めであることを論じられた」と

ということがまたルターの所に出てきます。まん中あたりに、



……キリストのこの第一声を端的に言うなら、
「時は来たぞ、神の国はここに在る。おまえたち回帰して福音体なる我に信じ入れ！」
という霊的な引力をもった言である。

キリスト自身が神の国の現象体なんです。「回帰」というのは「身を翻^{ひるがえ}して」、福音体である私の中に信じ入れよという霊的な引力を持った言葉である。引力のように吸いよせる吸引力と言いたいですね。

キリストがイスラエルの旧約宗教の大改革者で、キリスト道をうち建てたことは言うまでもない。イザヤ書に「父」といわれている神に、「聖旨を成らしめ給え」と提身の祈りをしてつねに新たに立ち帰り、父と一つになっていることが、彼の恒常的、回帰であった。絶対次元を質的に体現していた実存であった。今もなお、そして世の終末に新天地が到来するまで天界に君臨し、自在に遍在し、聖霊として内在する宇宙的な霊である。

キリストは宇宙的な霊であると。

神に在って、罪に勝ち、死に勝ち、サタンに勝ち、陰府^{よみ}に勝った

これも「神に在って」という。これが大事ですね。キリストは自分の力で勝ったのではない。常に神に在って。もつと言えば、聖霊に貫かれてです。

罪に勝ち、死に勝ち、サタンに勝ち、陰府に勝ったキリストは、我々に即時即処、聖霊として入って来て下さる。

至る所どこでも、いついかなる時にも、聖霊として入ってきてくださる。ここへ聖霊として入ってきてくださるんです。気がつけば入ってきてくださっているんです。

皆さん、呼吸は気づかずしてなまっていますね。空気は入ってきています。鼻や口を塞いだら入ってきません。でも、そうでない限り入ってきます。水泳で

「水の中で息を吐きなさい」

という。吐いてパツと口を開けたら、勝手に空気が入ってくれます。下手な間は、吐いてすぐ吸おうとする。

「そんなことをするからダメなんだ。吐くだけ吐いてパツと口を開いたら、もう入っているんですよ」

と、コーチは仰つてくれる(笑)。

「へえー、そんなもんですか」

と。上手な人はそれを無自覚的にやっているわけです。だからいつまでたっても彼は息詰まらない。息詰まらないし疲れない。吸おうと思うと、これはダメですね。

だから、聖霊の呼吸というのも、始めは自覚的でしょうけれども、そのうちに

「知らずして聖霊を呼吸していました。知らずして祈っておりました。私の祈りは魂の呼吸であって、気づかずして祈っておりました。道を歩いている時にもいつ



しか、空を見ている時にも、祈りになっていました。大自然を讃えて素晴らしい
なと思う時にもう心は祈っていました、霊は祈っていました」

と。だから、独り大自然の中を散歩する時は絶好の祈りの時ですね。

「あつ、木々みなが祈っている、みんなが神を讃えている」

と、そういう思いになれば、私も一緒に祈ります。

「あつ、鳥がさえずっている。あれは御名を呼んでいるんだな。御名を讃美してい
るんだな」

と、そういう思いで、気づかずして聖霊の世界の中に導かれている。気づかずして祈って
いる。そして自覚してまた祈る。そういう連鎖の生活をなされれば、決して信仰生活とい
うのは窮屈なものでも何でも無い。ごく自然です。ごく自然になってくる。始めは、

「何時何分に祈りましょう。一日に何頁、聖書を読みましょう」

とかね、そういうものを自分のカリキュラムに組んで少しやるのも、それは必要かも知れ
ません。けれども、ある日のカリキュラムを終えれば、あとはもう自由に、

「何かだらしがなくなっただんじやないかな」

と自分で思うくらいでいい。それでもちゃんとその世界に入っていける。それから、集会
を欠かさないこと。御言みことばに触れることを欠かさないこと。その言を聞くことを欠かさない
こと。そういう生活をなさっていけば、先生の言ってられることが自然に入ってきます。

そのような事態を念願し、預言していたのが預言者たちであった。預言は預言以上に
成就した。そして既に見たように使徒たちに聖霊のバプテスマが授けられて、彼らは
キリストの証者となった。使徒たちのことはここに触れる要はない。

キリスト教史において「宗教改革」といえばルターにおける宗教改革(Reformation)であるが、この改革以前の先駆者たちを忘れてはならない。改革者たち
は伝統的な流れからはいつも異端視される。イエスがユダヤ教の大異端者で相対的現
実としては十字架にかけられ、処刑されたというわけである。ペテロもパウロもユダ
ヤ教の異端者である。ルターもカルヴァンもカトリック教の異端者である。ところが
この異端者たちが本当の正統であり、精神史の底流や本流を成すのである。彼らこそ
根源回帰の改革者だからである。

宗教が信条と礼拝形式と立派な礼拝堂と誠律等で硬化現象を起こすのは東西の宗教
史が示すところで、イスラエル宗教史においても、第二神殿建立後、ユダヤ教となっ
てからは神殿宗教、祭司宗教、誠律宗教、といった形式に硬化し、教法師やパリサイ
派がその中心勢力となった頃、キリストが現われて、「偽善なる学者、パリサイ人よ」
といって彼は攻撃の矢を向けて、改革以上の改革を成し遂げた。その結末はユダヤ教
の異端の首魁として十字架にかけられた。十字架のキリストは全く悲劇の絶頂である。
「わが神、わが神、何ぞ我を棄て給いし！」この地軸も碎ける義の叫びは、世の終末ま



でひびきつづける。殺されながら殺人者たちを「ゆるしてやって下さい」とのどん底の愛が世界史を荷っている。しかし、この羔こつひがいつか天的な怒を発したら、そのときは世界の終末である。》

こうで、

「わが神、わが神、何ぞ我を棄て給いし！」

とあります。これが先生の、ある意味では、ひとつの特色なんですけれども、おそらく、先生が独特の理解を示されたと思います。先生は、

「これはキリストの義の叫びだ」

という。その「義の叫び」ということの中身は、小池先生は次のように言われる。

「私はあなたの聖旨みむねを百%実現してきました。私の生涯は『汝の御意みこころを成らしめ給

え』がこの身を貫いた。これで全部、明け渡して、あなたの僕として貫きました。」

と。貴神あなたは主、自分は僕しもべ。僕として聖旨に従うという従順、これを貫きましたと。この姿が義である。義とは御意が百%その人を通して現れ、行われている姿、それが義だと。そういう意味の「義人」というのはキリスト以外にない。

人間は誰しも自我があり、わが思いがあつて、神さまの思いとにズレがある。そして、「聖旨を行いたい」という気持ちはあつても、やっっていることはそうはなっていない。

「己の欲せざる悪はこれを行い、己の欲する善はこれをなさず」

というパウロの嘆きのように、どうしても己を立てたい。それが「罪」ということです。

「自我というものが罪だ」

ということを私はこの前の講演会で申しました。ところが、キリストは人であり給いながら、常に自分を明け渡しておられた。だから、キリストは常に神の前に自分を何者とも思っておられない。それを小池先生は「無者」と言われた。己が立っていない。正に自分が在るお方でありながら、人でありながら、しかし、神さまに対しては、対神さまの関係においては、キリストは本当に無者であられた。それを実現しておられた。

だから、先生はキリストの姿を「無的実存」と言われた。この「実存」というのは、単に人間がそこに存在しているという、物体として横たわっている、ただ立っている、そういうあらゆる評価を抜きにした——カメラで撮るといふか、レントゲンに撮るような——そんな人間を考えないで、「実存」という言葉を先生が使われる時は、それはどこまでも意志を持った存在の具体的な在り方です。だから、「生きさま」と言ってもいいし、意志を持って自分で判断して、自分で「こうしよう」ということを自己責任で決めていく、そういう人間の在り方。これを「実存」という言葉で表されたのだと思います。

「実存哲学」という——私は勉強してないけれども——どうも、いろんなところから推し量ると、そういうことを「実存」という言葉で表されるんだらうと思う。つまり、責任をとる人間、自分の意志を持ち、自分で自分の道を決めていく人間。そういう人間としてみ



たときに、イエスは神さまの前には絶えず己を明け渡し、空っぽにして自分をナッシングにして、サムシングとは思わない。そういう道を選びとって、そこに徹して行っておられる。これを小池先生は「無的実存」と言われた。それが「義人」の姿だという。

我々はとても無的実存とは言えない。無者にはなれない。もし可能とすれば、それはいたたくしかない。キリストに、その無者の姿を我々はいただく。無をたまわる。賜りたる無であつて、自分から成る無ではない。キリストの場合はそれがスーツとできた。ここが我々と違っていたというふうに言われる。そのように、キリストの神さまに対する関係におきまして、神さまを自分の「主」と自覚するときは、「神さまは自分の主である」と自覚するときは、自分は「僕」である。僕にとって大事なことは、

「主の御意がどこにあるか」と、それだけだと。

「主の聖旨の通りに私を動かしてください。あなたのお望みのことを、どうぞ私を通してなさってください。それがいかようなものであろうとも、私はその通りいたします。」

という、これが僕の姿なんです。たとえそれが自分に利益であろうが、不利益であろうが、好きであろうが、嫌いであろうが。そんなことは問題にしないで、

「御意なるがゆえに」

といつて従っていく姿が「義」だという。これは先生の仰る通りだと思います。

「そのように義を貫いた私を今、あなたはお棄てになる。それであなたの義が貫かれるんですか!？」

というプロテストの叫びだということ、あの言葉で先生は捉えられた。

「義なる神さまがこの義なる僕を棄てて、あなたの義が立つんですか!？」

というプロテストの叫びだと、こういう捉え方をされた。私もそう言われれば、

「なるほど、そういう面もあるな」と思う。先生は怒るよな、

『そういう面もある』ではなく、それだけだ」

と。でも、私は

「もう一つあります。先生、いかがでしょうか?」

と言いたいんです。それは何かというと、神さまは、この角度からは「主」であり、自分は「僕」である。もう一つは「父」、そして自分は「子」である。しかも、私は「愛子」と言いたい。「汝を愛しむ」という。愛されている子、愛を100%に受けている子。神さまのことを「父よ」と言う。それは「子」として。子たるの霊をいただいて、「父よ」と呼ばれた。我々はなかなかそういう「子たる霊」を自覚できなかったときに、

「御霊が我々の中に宿って、『アッバー、父よ』と呼ばしめ給う」



と。ローマ書やガラテヤ書に出てきますよね、「アッバー、父よと呼べる」と。恐れをいだかせる霊ではなくて、子たるの霊、愛子としての霊を我々に下さる。この愛の関係というのは——義の関係というのはどちらかという緊張関係、意志的關係、「私は御意に従います」という意志的な関係です——それに対して、愛の關係というのは、抱き抱かれるという一如の關係なんです。一つなんです、分離できない關係、一如一体です。これが愛の關係なんです。キリストの素晴らしきは、一方では、「主よ」と言つて、僕の姿で義を貫き守る。他方では、「父よ」と言つて、抱かれて一つであつて、その愛の關係である。これが美事に分裂しないで一つであつたと、こゝう私は思います。

人間は、愛の關係がべったりくると、これは甘やかされてダメです。義の關係が立つていると、おどおどして萎縮してしまふ。なかなか両方が両立しない。ところが、キリストはこれが本当に両立していた。

この愛の關係というのは本当に一つでしょ。これは今まで引き裂かれたことがなかった。これがあの十字架で引き裂かれた。分離されて棄てられた。

「どうして私をお棄てになるんですか!？」

という、これは理屈を超えた愛の叫びだと、私はそう思っています。

キリストが十字架にかけられることは、キリストは早くから自覚しておられました。ゲツセマネの祈りで、

「これは私の受くべき酒杯だ。どうしても聖旨ならば、それに従います」

と言つて自覚された。そのキリストがあの十字架の最期のところであの叫びを發せられた。それは小池先生の仰る「義の叫び」というのが出たのでしょうか。同時に私は、「愛の叫び」が出たと思う。

「あなたは私を本当に引き裂いて、お棄てになるんですか、お父ちゃん!？」

という叫び。そういうふうには、私は非常に人間的かもしれないけれども、そう取りたい。最期はもう無意識的な叫びです。まあそんなふうに取りたいものだから、ちよつとここに小池先生が、

「義の叫びだよ」

と仰つたことにプラスして、

「愛の叫びも入っていました。愛が破られた。あなたは愛をお破りになるんですか。

あなたの愛はどこへ行つたんですかという叫びでもありますよ」

と言いたいです。

●独乙神秘家

それから次は、ドイツの神秘家です。カトリック教会の中で、これは中世のドイツの神秘家という方々が現れてきた。修道院の中だろうと思います。あるいはここに「ドミニコ



教団」と書かれています。

《独乙神秘家》

……カトリック教会は殷然たる教階制度（ヒエラルヒー）を幾世紀も続けて、いろいろな逸脱現象や硬化現象が起きていた。内面的な深さへとたましいを方向転換した人々が独乙神秘家たちであった。……宗教的内面性の深化を以て、教会に神秘の光を放ったのは、中世末葉のドミニコ教団に現われた「ドイツ神秘」である。それはエックハルト（1260～1327）、タウラー（1300～1361）、ソイゼ（1295～1366）等の神秘家たちであった。更には著者不明の「ドイツ神学」（Theologia Germanica）である。

宗教に「神秘」（ミステイク）がなかったら宗教でなくなる。イエスはその意味で、最大の、否絶大の神秘家である。神秘は宗教的根源現象（ウルフェノメン）である。直接的な霊的直観や、瞑想や祈りにおいて神体験をする。神秘は神的なものの現在を直接に体認し、或は高次元なものを体現する霊的な根源現象である。》

そういう面があると。だから、宗教の世界でおよそ宗教体験とか、神秘とか、そういうものを否定したら、それは単なる理屈の解説に終わってしまう。そうでなくて、みんな神秘的なものから発している。大本教にせよ天理教にせよ、そういったものたちの初代の人、始祖はみなこの体験をして、そこから啓示を受けて、それを告白していった人だったと、そういう意味で本ものだと思う。本ものだからすべてだとは言いません。少なくともその人において現れた本ものがそこに示された。しかし、それが全部ではない。限定されています。限定された限りにおいてそこに本ものが現れていると思います。それを頭から否定してはいけません。けれども、それが後代の人になって形骸化して、単なる文字になって、そしてその質が失われたら、それはダメですね。

この中世の神秘家たちも本当にそういう意味では本ものですがけれども、ただその中世の神秘家のひとつの欠点は直接に神体験するということにあった。直接の神体験は危ない。今でいうと、スウェーデンボルグ「エマヌエル・スウェーデンボルグ（Emanuel Swedenborg 1688～1772）スウェーデン王国出身の科学者・神学者・思想家。生きながら霊界を見て来たと言う霊的体験に基づく大量の著述で知られる」なんていう人もややそういう傾向があると言われています。直接の神体験で、霊界のことを物凄くあの人は見てきて書いているけれども、ややキリストの十字架という霊的体験が何かすつ飛んでいると言われています。私はスウェーデンボルグを充分研究していませんが、サンダー・シング「Sunder Singh (Sadhuj) 1889～1929」インドのキリスト教伝道者。18歳のとき神秘的な体験で回心し、イギリス国教会で洗礼を受け伝道者となる。インド的神秘主義とキリスト教信仰を結合させた」の方は非常に十字架が立っていますから、あれは大丈夫なんです、サンダーシングの霊体験は。やはり霊体験が人によって様々ありますけれども、ハッキリ十字架を前面に打ち出して、そして聖書の言葉を——サンダーシングはヨハネ伝を物凄く引いています——そういう御言をしつかりと引いて、十字架の主を讃え



ている、そういう霊体験は安心できませんけれども、キリストぬぎの直接的霊体験は危ない。いつその霊がサタンに切り替わるかわからない。といいますのは、霊体験をしますと、「自分が何者かになった」という錯覚に囚われる。

「人が見えないものを私は見てきた。お前がわからないものを私は知っている。大した者になったよ、私は。どうだい、お前の運勢を見てやろうか。お前はこうやったらいいよ」

なんて、人の運命までも定めるくらいのお偉い方かたになってしまいますよ。そこにサタンが入ってくる。だから、小池先生はいつも「平伏ひれふしだよ」と仰った。

「十字架の前に平伏しなさい。霊的に深められれば深められるほど、霊的体験をすればするほど、十字架の前に平伏しなさい。そうでないと危ない。やたらと霊体験を欲しがってはいけませんよ」

と言われた。これはどこまでも、示されるものであって、賜るものであって、自分から追いつめるものではないんです。だから、パウロのコリント書の中で、

「一番大事なものは愛である。御霊の賜物は様々ある。でも、賜物中の賜物、根源なるものは愛である。」

と。あのコリント前書13章で、「最後の生命を示そう」と言つて、あのコリント前書13章が出てきた。だから、愛は共通なもの、愛は聖霊そのものなんです。賜物はそこから発してくる部分的なもの、極言すれば、手段です。愛は本質、本体なんです。

そういうことで、宗教体験は尊いけれども、それはひとつ誤ると劇薬になり、人を活かす方にも使われるし、殺す方にも働いてしまうということです、この神秘家たちについては、尊敬はするけれども、限界を知らなければいけない。

182頁の終りから6行目の所に、

《……神秘家たちには十字架の贖罪の把握が欠けているからである。

だから、異端視されるという面があると。それから次の183頁の2行目の所に、ルターがドイツ神学を讃えているけれども、

……とはいっても十字架の贖罪が欠けている神人合一で、つまり、神と融合しようとする。禅宗は悟りですけれども、神秘家たちは祈りの中で、あるいは苦行によって、祈りによって、神と直接的に一つになろうとした。そういうことを味わったけれども、それは十字架の贖罪が欠けている、そういう神人合一で、

典型的神秘思想である。

それは自覚しておかなければいけない。けれども、およそ宗教の中に神秘を排除してしまうと生命がなくなる。現代のキリスト教界はどうですか。およそ神秘なるものを、そういった聖霊の世界というものを全部シャットアウトしているのではないかと、そういう批判を



しておられます。それから次に、タウラーの所で面白いことが出てきます。……タウラーは、罪とは自分というものがあること。信仰とは自分というものを無くすること。

先生に言わせれば、十字架で無くされていることに気づくという、十字架を通してということ。タウラーは直接性なんです。自分というものを無くすること。神の如き生活とは間断なく自我の自由を抹殺すること。

これは努力で抹殺するとなったら、これは大変です。

神の如くなるとは、人の第一の本性をとりもどすこと。とっている。

昔、アダムとイブが神によって創られたときには、本来の神の似姿であった。その姿に還ろう、こういうことだと。

また彼は人間において隠された神のすがたを見よとした。

間違えではありません。人間はみな本来、神の子なんです。神さまは変なものをお創りになさらない。その意味では間違いではないけれども、我々においてはキリストを通してそれが回復される。もつと言いますと、小池先生は、あのアダムとイブの神話は実はキリストを通して、キリストの姿をそこに見ないと、手放して人間が神の似姿として創られたというように受けとってはむしろ危ないよ、というようなことを書いておられる。

このタウラーの人間認識は、あたかも偉大な彫刻家が大理石の塊かたまりを見て、大理石の塊を目の前に置いて、どういう姿をそこに造りだそうかとちゃんとビジョンを描いて、その姿へ段々近づけていく。始めに描いた姿の通りの姿にその大理石の石が変貌していく。それが彫刻家のやり方だと。それは実は、大理石の塊の中にもう本当の姿を見ていたからだ。これから現れてくる姿、つまりカイノスを見ていたんだというわけです。そういうことを小池先生は言っておられる。

それは偉大な彫刻家が大理石の粗塊を見て〈汝はいかに神の如き美を蔽いかくすや〉
といて大理石塊に撃つをあててそこに神的人間像を作り出すにも似ている。我々は自分自分を掘り上げてそこに神の似像を創造しなければならぬ。神は神自身のかくされた

相すがた、神の隠り身かく(かくりみ)を

平仮名で「かくりみ」と書いて、「か」と「み」に点を打っていますが、点だけ読めば「かみ」ですね。

神の隠り身かく(かくりみ)を人間の中に見てあり給つ、と言っている。

これはタウラーの言葉です。

……彼らに共通な点は、自我の否定的認識と同時に、本来の人間の肯定的認識、神の似相にすがた、イマゴ・デイを尊重して神と融合せんと、靈的に知情意を深めんとしたところにある。》

こんなふうに見ておられます。



● 宗教改革者マルティン・ルター

それから次にルターに至るまでのウィクリフとか、ヨハネス・フスとか、サヴォナローラ、これは飛ばします。ルターの所へ行きます。190頁。このルターも実は、『聖書の人ルター』という一冊の本(著作集第7巻、1984/2刊)を先生は書いておられますから、そこへ本質的には譲るとして、ただひとことだけルターから引きますと、191頁の真中あたり、

《宗教改革者マルティン・ルター

……宗教改革の精神の焦点とは何か。それは九十五ヶ条提題の第一条に於て、これを見る。

一、「我らの主にして師なるイエス・キリストが『汝ら悔改めをなせ……』と言いつつとき、彼は信徒の全生涯が悔改めであるべきことを欲し給った」

……この「汝ら悔改めをなせ」は、マタイ伝第4章17節のギリシヤ語原文ではメタノエイト *metanoete*、ヘブライ語では *shubû*、ラテン語では *transmentamini*、^{トランスメンタミニ} 地的な自己中心の肉の心を、天的な、霊の心、神・キリスト中心の心に「転向せよ」、それも心や魂ばかりでなく、全存在を以て回帰せよ! というのが真義と思つ。

即ち宗教改革の焦点は、たましいと存在の「コペルニカス的転向」にある。天動説から地動説に転ずることである。

即ち、地球が中心で天が動いていると思つていた。ところが実は、天は動かないで、地球が天の周りを、太陽の周りを動いていた。地球は回転しながら太陽の周りを動いている。それは太陽の引力に引きつけられて、一定の距離を保ちながら、太陽の周りをグルグル回っている。地球自身もまた回転している。地球の方が動いている。神さまの方は動いていらずしやらない。神さまはカイノスであつて、人間は新たにいろんなものを発見していくでしょうが、それは神さまの本質がそこに現れてくるだけ。そういう在り方です。

我々の日常生活が全存在的に、実存的に神・キリストの原動力で動き出すことである。キリスト中心に回転するために、キリストに回帰せよ! ということである。キリストに回帰すると聖霊の力がくる。全存在がつねに新たにキリストに回帰せしめられつつ聖霊の力で実存するのである。

私たちの側は、気づいて帰り行くこと。別な言葉でいえば、心を開くこと。主さまに入ってきていただくこと、内住してくださることを自覚すること。そうしたら、入ってきてくださっている聖霊の御力に押し出されて、私たちの全生活は御意に^{かな}適うようなところに変えられていく。私の力ではない。御霊の力である。自分の功績ではない。神の御業である。私は皆さまに語る時も、講演会で語る時も、およそ己^{おの}というものがそこに立っていたら、恐くて語れない。

「主さま、お願いいたします!」

という、本当に主さまに^{すが}縋り付く思いで、ここに立つわけですね。そして語らされている



というのが実相でございしますので、私の功績は一つもありません。主さまの御名を讃えていただきたいと思う。だから、

全存在がつねに新たにキリストに回帰せしめられつつ聖霊の力で実存するのである。その回帰の要めは十字架である。十字架によってキリストに回帰、帰入すると聖霊が臨む。だから全生涯がつねに新たに回帰しつつみたまの力で動くことになる。

この「無の神学」では是非とも強調したいのは、「悔改め」が全存在的回帰という極めて積極的な意味内容をもつことである。

単に「罪を悔い改めました」なんていうのではないということです。

キリストに限りなく回帰し往くことが、限りなく前進することであり、「栄光より栄光へと進ましめられ、ついにキリストの相すがたに化するなり」とパウロが「コリント後書第3章18節で言っているように！ それゆえに私はルターの第一条を次の如く表現する。

『我らの主にして師なるイエス・キリストが『汝ら回帰せよ……』と言い給つとき、彼は信徒の全生涯が回帰であるべきことを欲し給つた。』

これはキリスト者の全生涯のみではない、各宗教の信徒が、夫々宇宙の大源につねに新たに歴史の終末まで、回帰すべきである。』

●(二) 新宗教改革——終末論的展望

それから今度は、194頁へ行きまして、これはぜひ今日、エッセンスだけでもお話したいと思います。素晴らしい文章ですよ、この「新宗教改革——終末論的展望」は。これは「内村鑑三とその無教会」(194頁)と、「万方帰一」(202頁)という、この二つを取り上げられました。この二つからこの文章は成り立っています。

内村鑑三はいまでもなく、いわばキリスト教界——カトリックとプロテスタントの両方ありますけれども——どちらにも共通なことは、

「教会の外には救いがない」

という点では一致してました。

「教会を離れてキリストの救いはない」

と。だから、教会から放り出されるということは、救いから放り出されるということなんです。それに対して内村鑑三は、

「放り出された自分でも、やっぱりキリストは救ってくださる」

ということを自分の全生活をもって彼は体験し、それを告白した。その意味では、一つの宗教改革であったわけです。

ルターはカトリック教会に対して、改革者になってしまった。彼は改革者になろうとしたのではない。自分の持論をぶつけたわけです。ぶつけてカトリックとの間に論争が起こって、それに対して聖書をバックにして告白をしているうちに、とうとう破門されて、そして「プ



「プロテスタント」(Protestant 反抗する者)というものが出来上がってしまった。しかし、彼は、教会は残しました。サクラメントの中でも「洗礼」と「聖餐」せいさんは残しました。ところが、内村鑑三はそこから放り出された。カイノスで放り出されたわけですから。「いや、そこにも救いはあった」と、サマリヤのカナンの女みたいなものです。

「食卓から落ちるパンくずをやっぱりいただくことが出来るではありませんか、そのパンくずにも生命はありますよ」

と、そう言つて、カナンの女は自分の娘を助けていただいたわけですから、内村鑑三はあたかも、食卓から落ちるパンくずを食べる小犬のような姿で神の恵みにすがった。そして美事に救われた。そういう告白が、「無教会」という姿をとつたので、何も教会を否定しているのではない。「無教会主義」という主義を主張したのではない。止むなく自分が教会の外に放り出された。しかし、

「教会の外にも救いがある。神の救いは宇宙的なこうだいい鴻大なものだ」

ということが本当の救いなんです。ところが、いつのまにか「無教会主義」となって、無教会主義の方々は何かというところ、教会と対立する敵対関係に立つてしまった。そこに悲劇があつた。どうにもならない。

「無教会主義でなければダメだ」

ということにまでなつた。これは勇み足ですね。そこまで仰つている先生がいるかどうか確かめておりませんが、何かそういう臭いがする。

「無教会主義でなければ、人は救われない。教会制度の中に止まっている人は程度

が低い。本当の自覚にきてない」

という、何かしら批判的、そして他をややもすれば見下すような、

「あなた方はまだ目覚めていない。我々目覚めたのが無教会主義だ」

と、無教会の優位を誇るようなところが出てくる。

● 小池先生のプロテスト

そして、聖書の研究に没頭する。しかしそこには、

「御霊がないじゃないか。祈りが、本当の棄身の祈りがないじゃないか」

というのが、小池先生のプロテストだったんです。先生はずっと無教会におられたから。内村門下であり、そして藤井門下で、五年間藤井先生の所におられた。祈りは実に整然とした祈りを皆さんなされた。一つもケチはつけられない。けれども、破れかぶれの、

「助けてくれー!」

という、そういう棄身の祈りがない。上品な整った祈りです。

「天の父なる神さま、今日はこのような集会を与えてくださり、感謝いたします」
なんてね(笑)。もう何か、神さまに対して演説ぶつているような祈りで、



「父と御子の名によって捧げます」

とかいう、整然たる祈りです。それはウソではないけれども、先生はそれでは、魂は響かない、揺さぶられないという。新約聖書に、

「助けてー！ ダビデの子よ、我を救いたまえ！」

と、叫んでやまなかったとあるでしょ、目の見えない方が路傍で。そして、弟子たちは抑えようとした。

「メシヤよ、ダビデの子よ！」

というのは危険なんですね。つまり、ローマの前には、王はローマの皇帝しかいてはいけないわけですから。それを「ダビデの子よ、ダビデ王の子孫よ！」と、「地上の王よ」という形で呼びかけることは危険なんです。だから、「黙れ、黙れ、黙れ！」と。でも彼は叫んで止まなかった。キリストはそこへ近づいてきて

「何をしてほしいの？」

「見えるようになりたい！」

「あなたの願い通りになれ！」

と。実にキリストは自然ですね、「願いの通りなれ」と。

そういう棄身の祈り。これが無教会に欠けていた。自分の心までは満足する。けれども、本当に魂がゆさぶられ、生きている実感が本当に湧くという、それが無教会の中で得られなかったということで、悶々としていた。

ところが、小池先生の書かれたものに非常に感動する人が九州にいた。やいのやいのと何度も「来てほしい、来てほしい」という手紙がやってきた。そこでとうとう痺れをきらして先生が行かれたのが、九州の手島さん（手島郁郎 1910～1973）という——まだその頃は小さな20人位の集まりの見すばらしい集会だったそうですよ——そこへ行かれた。そして一緒に三日間、集会をなさった。聖書を講義して5時間位ぶっ続けでされたそうです。手島さんというのは恐い人で、小便したくてもじもじしてたら、「何をしとるか！」と怒られて、小便にも行けなかったそうな、凄い熱血家だったそうです。私は直接には知らないけれども、恐かったそうですよ。5時間や6時間の集会なんかへいちやらだったらしい。それで祈りとなったら、「ウワーツー！」と祈りだす。それで、小池先生はそういう祈りをやっているうちに、ウワーツと天から火がふつてきて、先生自身が御霊に痺れて、何か50センチ跳び上がったとか、そして祈りは異言になっていったという。手島さんがニコニコして近づいてきて、

「小池先生、あなたは立派な祈りの異言ですよ、聖霊のバプテスマですよ」

と言われたという話です。そこで霊がはげで、取れて本当に御言が内面化して、聖霊が内住されたということを感じて、帰りの汽車の中で——熊本から東京まで24時間くらいかかったそうです——その列車の中で読む聖書は躍動して、文字が躍っているという。これだ。「聖霊」という言葉が何度でも出てくる。こんなに聖霊のことが言われているかとい



うことに初めて気がついた。

そこで、東京へ帰ってきてからが大変なんです。集会がガラッと変わった。一番嫌がったのは奥さんでしょうね。家庭生活もあったものではない。その被害者たちが子供さんたちです。手島さんがやって来たら泊り込む。徹夜の祈りをやって、ワーワー叫ぶ。近所から苦情がやってくる。

「もうちょつと常識的にやってくれ」

というのが奥さんの正当な主張ですよ。そういう時代があった。

それを全部、「異端だ!」といつて、シャットアウトしたのが無教会だった。だから、先生は無教会からアウトサイダー(部外者、除け者)にされた。けれども、

「私は自分でそうなったのではない。これは神の業でどう仕様もないじゃないか」

と言いつけたわけです。それを棄てるというのは、ちょうどあのジャンヌダルクが「棄てる、棄てる」と言われた。ガリレオは「それでも地球は動く」と言った。それを棄てると言われた。

「見たこと、聞いたこと、味わったことを告白せざるを得ない」

という使徒たちの心と同じなんです。それをシャットアウトされた。

「仕方ありません。しかし、私は無教会のために執り成します。無教会が本当に

内村鑑三を超えて前進する道はこの聖霊に来ることだ」

と。それで、内村先生を凄く誉めているんです、小池先生は。この文章を読んでください。

「先ず今の青年諸君に勧めたいことは内村鑑三全集を精読することだ。こんな宇宙的な桁違いの魂はない」

と言っている。しかも、

「終生、私は内村鑑三を尊敬する。しかし、聖霊の次元からはズレがあった。聖霊は内村鑑三の中に火花していたけれども、自覚的に聖霊のことは仰らなかつた。それをいわばバトンタッチを受けて引き継いで展開したのが私ではないか。その私がアウトサイダーにされて、内村鑑三の十字架の所で止まっているのが無教会の現状ではないか。」

と。それに対するいわば嘆き、祈り、その文章なんです。

●内村鑑三とその無教会

それで、195頁の終りから4行目。

《福音の告白の生涯》

……内村鑑三という人は、その少年時代から晩年に至るまで、いつわりのない人間であった。虚飾やポーズのない人、言つことなすことが、その瞬間瞬間において全人的な人であった。誰か天候にいつわりがあるというか。雨天、晴天、曇天、無風、強風



台風、千変万化の天候、そのどれもが本物である。そのように、いつも内村は全人的言動の人であった。だから矛盾があり、劇的である。あの膨大な著作の言説の内容は宇宙的なものである。内的にも外的にも劇的な生涯そのものが福音の告白であり、^{あかし}証示となっている。

全人的とは、あるがままの自分を分裂なくそのままぶちまける魂身の態勢をいう。知情意が渾然^{こんぜん}として全人的に動く。

そういう姿だと。キリストの姿がそうですね。そういう姿だったと。まん中あたりに、鑑三の初期の名作に“*How I became a Christian*”（『余は如何にして基督信徒となりし乎』）という英文の日記体的な回心録があるが、そこにすでに全内村の中核が在ることを知る。

「余はキリストと彼の使徒達よりして如何にして余の靈魂を救ふ可きかを学んだ。併し預言書よりは如何にして余の国を救ふ可きかを学んだのである」

すなわちキリストの十字架信仰を深く体受した。また国の存亡の危機と没落に当たって輩出したイスラエルの預言者たちの畏神に基づく真の愛国心、特に預言者エレミヤの愛国心に内村は深く共感した。それで日露開戦に当っては、非戦論を掲げて愛国の至情を吐露した。

彼は1886年3月8日、回心を告白してこう言っている。

「余の生涯に於て極めて重大なる日なりき。基督の贖罪の力が今日の如く明瞭に余に啓示せられしこと嘗て^{かつ}あらざりし。神の子が十字架に釘付け^{くぎ}られ給いし事の中に、今日迄余の心を苦しめし^{すべ}凡ての難問の解決が存するなり。……今や余は神の子なり、余の義務は耶蘇を信するに在り。彼のために、神は余の欲する凡てのものを与へ給ふべし。

彼は彼の栄光のために余を用ひ給ふ可し、而して遂に余を天国に救ひ給ふべし。」
即ち、あの内村鑑三にして1886年3月8日までは、本当に十字架が受けとれていなかった。耳には聞いている。綱要は知っている。しかし本当に自分の中に内面化されていなかった。

「いろいろな愚かなことをやってきた」

と、内村鑑三は『求安録』で言っています、皿洗いをしてみたり、病院で働いてみたり、その他様々なことをやっただと。けれども、自分にとっては本当の罪のゆるし、自由、解放というものを味わえなかった。アマスト大学のシーリー総長の所へ行つて悩みを打ち明けた。そしたら、総長が仰った。

「君は自分を見すぎているね。どうしてキリストを見ないか」

と。そこで、十字架を見るということがヒントになった。そしてそのあと、この回心の告白となった。自分ばかりを見て、自分ばかりを責めていた。ところが、キリストが全部、自分のなすべき必要なことごとくとなし給うた。過去も現在も未来も全部を引き受け



てくださった。そのことに初めて気がついた。そこで本当に解放されて自由を得た。だから、「神さま、この自分を用いてください。あなたの手足として働かせてください」と、初めてそこに自分の使命の自覚がやってきた。

すなわち内村はおのが救いの土台をキリストの十字架に置き、生涯の意義と目的をキリスト中心に、キリストの栄光に置いた。》

彼は教会の外ですから、洗礼も聖餐もありません。「自分でやった」というんですね。

《全く自由な受洗を》

彼は十字架の贖罪を信受したとき、特にこれを記念せんとて、自分で「一房の野葡萄の果汁」を搾り、「ビスケットの一片」を割いて、感謝の祈りを捧げ、「主の体と血に与る」聖晚餐を自らいとなんだ。また驟雨が降ったとき、天来の水に「全身すぶ濡れ」となつて全く自由な受洗をやった。

教会の信条、組織、制度、宗教的儀式、祭典などを好まず、生命的な信仰生活でなければやりきれない彼の魂は、必然ルター、カルヴィンの宗教改革をも突き抜ける方向へと徹していった。それがアメリカから帰国後、期満ちて狼火をあげた「教会なき」人たちのための「無教会」キリスト教であった。

これです。教会なき人たち、教会へ行けない人たち、教会の敷居が高くて悩んでいる人たち、教会で躓いた人たち、そういう「教会なき人たちのための無教会キリスト教」、つまり、いわゆる教会は本質的なものではないと。

信仰のほか何も要らない「教会を要せざる基督教」(Churchless Christianity)の唱道とな

った。これが「宗教改革仕直し」の必要」(Need of Re-Reformation)と彼自ら提言した

所以のものである。》

しかも、内村さんというのは非常に動的な人であり、その時その時、瞬間的に自分に迫っているものをバーンと告白して、しばらくしたらそれをもうスツと忘れてしまつて、次のことにまたバーンと行くという、そういう面がある方なんです。

だから、ここに三つの段階を書いていますね。シーリー総長によつて十字架の贖罪信仰を受けた。それから今度は、ルツ子さんという娘さんがお亡くなりになった。それで物凄いショックなんです。『基督教徒の慰め』の中にも出てきますけれども、何日も何日も内村さんは心で泣いていた。ある時、声が聞こえた。ルツ子さんの墓の前でね——奥さんの時だったかな——とにかく、

「お前は自分のために泣くことはやめろ。お前は私のことを思っているくらいの思いをもつて世の人に尽くせ」

という声が聞こえてきた。奥さんの時かもしれない。ルツ子さんという娘さんの時は復活の信仰が与えられたという。それから今度は、あの悲惨な第一次大戦を通して、これはキリストの再臨をまたないでは世の人はどうにもならないと、再臨信仰へ突っ走る。そして



また、内村さんは街頭伝道とか、デモ行進をやるくらいの人ですから——それもまたある時にパツと止めてしまう——そういうふうな火花して、しばらくするとまたパツと止むという、そういうふうな意味では運動家でありました。

小池先生はそういうことは一切なさらない。私共もしません。でも、私たちは本質的なことを絶えず告白し続けていく。本質的なことを本当に我々は出て行って、根源的なものが人々の中に根付いていけば、それがやがて実を結べば引っくり返す。そういう我々は信といえは信ですね。

人は、外的にやることは人それぞれ様々な課題がありますよ。それを教会が引き受けてしまったら、今度は逆に、本当に教会でなければできないものが薄れてしまう。それが我々は恐いんです。我々はみんなそれぞれ職業を持ち、それぞれの天的な課題をいただいている人間です。一人ひとりが賜物をもって尽くせと言われてる。

そういう者たちが、教会というものにおいて、ある政治的運動、国際的運動、何かそういった——それは善なんですよ、たとえ善であつても——それに没頭して、そこへ「ワッショイ、ワッショイ」と行ってしまったら、今度本当に我々の根底的なもの、それをもって立つべきもの、それがいつしか薄れていって、運動に巻き込まれてしまう。「原水禁運動」(原水爆禁止運動)また然りです。それ自体みんな善なんです。善なんですけれども、それは我々のこの召団というものの本質からいえば、それは手にあまる。個人でいくら参加したついても、組織としては参加したくないというのが私の願いです。我々はどこまでも、隠れた所で隠れた父に祈る、祈りの集団として本当に

「この火燃えたらんには何をか要せん」

という、そのキリストの悲願霊願を受けとつて、私たちはどこまでもこの根源なるものに帰っていく。そして絶えず前進せしめられる。そして、世直しにそれが役立っていく。本当に一人一人ひとりが全部、内的変革を経たら、この地上は変わるはずなんです。それが「人は変わらないものだ」と決めつけて、

「だから先に政治面で戦争を止めましょう」

というのは、これには私はくみしません。聖書は

「世の終りは来る」

と言っている。黙示録なんか見たら、

「もう地球の三分の一は酷いことになる」

と書かれている。あんなことは成就してほしくない。けれども、神さまのその聖旨の中にあることを我々は止めるわけにはいかない。我々は何をするかといえは、

「絶えず祈っておれ」

というその御意、キリストの聖旨と本当にピタリ一つの生き方をするという、それをするしか私にはないと思つてずっと来ています。



随分悩みましたよ、私はもうクリスチャンになった時から、あのマルクスとの関係、神学と宗教の問題、それから社会運動にどう対処するか、キリスト教会はいかに世に貢献するか。それこそ、キリスト新聞の中にはそういう記事で満ちていますよね、

「我々は何も関与しない方がいいのか」

という。絶えず悩んできました。けれども今は、私が今告白したその生き方に徹して行くと思うっています。けれども、他人がいろんなことを申されても、私は一切口をはさみません。それぞれが神さまと直結して、

「自分の賜った使命はこれだ」

という自覚をもって、それぞれが神さまに返してほしい。その点でこの世の人たちは自分たちの運動の成果を誇ります。けれども、私たちはそんなものを誇らない。聖旨が成つたら、それを主さまに感謝し、主さまにどこまでも栄光を帰します。一人ひとり、それぞれの教会が主さまに直結して、そして自分たちのこの世の使命を自覚して、それに向かって邁進して進んで行く。私はそれしかないと考えている。

●使徒的信仰の現実

それから、「使徒的信仰の現実」ということで、内村さんは文章的には聖霊のことをチョコチョコ触れておられるけれども、本当にそれが現実にはなっていないかつたということを言われてきて、199頁の「使徒的信仰の現実」、これは内村鑑三の『一日一生』の5月31日の所に引かれている文章なんです。

《使徒的信仰の現実》

「キリストに同化されし者、キリストの活ける体の一部分となりし者、其困苦と歎喜と、其恥辱と栄光と、其死と復活とを、彼の中に在りて彼と偕に父なる神より分与せられし者、是れが基督信者である。

キリストに同化されて、キリストの活ける体の一部分となってしまう、そういう人。信ずるとは此場合に於ては知識的に認めることではない。亦感情的に信賴することでもない。キリストを信ずるとは彼の神格の中に我が人格を投入することである。こうして我を無き者として彼をして我に代つて我が表にあらしむることである。是が即ち信の極であつて、キリストは我等より斯かる信仰を要求し給つのである。キリストが神であり、霊の宇宙であり、我等が其霊界の一部分となるを得て、始めて我等の聖化も満足に行はれ、亦キリストの光は我等を通して世に顕はれるのである。」

この一文は内村鑑三の信仰告白の白眉と私は信じている。ガラテヤ書第2章20節と「コリント後書第3章18節を告白しているよつな一文である。《

「われ主と共に十字架せられたり」という告白に通ずる。けれども、なぜこれを現実化してくださらなかったのかという、その嘆きが小池先生の嘆きです。それから、あまりにも「聖



書の研究」ということで、研究の方に重点が移りすぎた。そして、あとの後継者の方がその研究の路線を引き継いで、ヨーロッパの神学には精通する。しかし、本当の霊的現実という所からはズレてしまったということを書かれています。201頁の5行目の所。

《キリストが

「然れど聖霊汝らの上に臨むとき、汝ら力を受けん。……地の極にまでわが証人とならん」(行伝1・8)

と言ったように、聖霊の力の証者となることをキリストは本願とされているのである。その聖霊のもつ愛こそは最深最大の力である。新約の使徒たちはまさにその証者たちであった。聖書はそのドラマであり、告白であり、実証である。単なる教えではない。

噫、内村鑑三！ あの烈々たるたましいの悲願を受け継いで、さらに突破し、あの重厚な構造をもつ使徒パウロを中心とする使徒的信仰の現実に還らん！ と私は霊願している。「エン・クリスト」(「キリストに在って」の聖霊の召団(エクレシヤ)がおのずから形成され、福音伝道の一環を承っている。

以上、私は忌憚なく述べた。すなわち焦点は十字架・聖霊不可分の事態にある。私は内村鑑三先生に深い敬意と感謝をいつまでももつ者の一人である。これからもこの偉大な魂の著作に触れてその文字を喰ってゆく。ただこと聖霊に関しては、使徒たちの文字の奥からの無量のひびきを体受してゆく。全聖書を光被するキリストの霊光をもって聖書を身読し、その現実を化体してゆきたくひたすら願う者である。

ともあれ、現代日本の特に青年諸君が、ぜひともこの古典的内村鑑三の著書を精読せんことを切望する。この真の日本人にして世界的人物たる内村を読むか読まないかで、その人の精神的分水嶺の水の流れがちがってこよう。この精神的危機の日本に、内村の活文字あることを忘れてはならない！

内村鑑三は一つの世界であり、宇宙である。歴史であり、詩であり、大自然である。彼の魂の著しう三つの叫びをここに掲げて筆を擱く。

「私は日本のため、日本は世界のため、世界はキリストのため、そして万物は神のためなり」

「宇宙万物人生ごとごとく可なり。言わんと欲する事尽きず。人類の幸福と日本国の隆盛と宇宙の完成を祈る」

この、

「私は日本のため、日本は世界のため、

世界はキリストのため、そして万物は神のためなり」

は英語では、

“I for Japan, Japan for the World,

The World for Christ, And All for God.”



という文章です。

● 万法帰一

あと「万法帰一」、これは本当に素晴らしいけれども、本当にエッセンスだけを読んで終わりたいと思います。207頁、これは是非、諸宗派の方々、諸宗教の方々にここを精読してほしいと思う文章です。その意味では、この「万法帰一」の所は始めからずっと読んでいた方がいいと思いますけれども、時間の関係で207頁から読みます。

《万法帰一》

霊の生命は愛

……宗教の真の現実、聖典の中から同次元的に告白されねばならない。霊法を体現する現実であらねばならない。法身的な質となつてゆくならば、そのときはじめて万法は帰一する消息がつかめてくる。そこはもはや概念や観念の世界ではない。天台、真言、浄土、真宗、時宗、臨済、曹洞、日蓮宗、何宗であろうとそれを帰一してつかめる境地である。ユダヤ教、キリスト教、回教、何であろうとそれを深くつかみ得る絶対境である。万法が帰一する消息は、法をして法たらしめている霊によつてつかめる。》

この「法」という言葉が出てきます。その法という言葉は204頁に出てきているんです。「生命の御霊の法」と申しました。キリストの法も、これは霊なる法則、霊の法だと。御霊の法則だと。仏教の世界でも仏法という法だと。205頁の2行目に、

《この霊法は旧くしてつねに新しくある。霊法の質は愛に他ならない。これは使徒ヨハネに於ても、ペテロに於ても同じである。要するに福音の心臓は愛である。》

然らば仏教に於てはどつてであろうか。深遠な哲理をもつ仏教はむしろ仏法（ブッダ・ダルマ）と称せられる方が当たっている。即ち覚者（ブッダ）の法である。法の帰するところは慈悲大悲の他何ものでもないであろう。南無阿弥陀仏と謂い、南無妙法蓮華経と謂つても、

「南無阿弥陀仏」の「南無」というのは「帰入」、帰り行く、祈り帰る、帰り入ること。「アミッター、アミッター」の「無量寿、無量光」の「覚者」であるところの「仏陀」に帰依する。これが「南無阿弥陀仏」ということ。「南無妙法蓮華経」というのは、「妙法に帰する」ということ。片一方は人格であり、仏陀に帰依していく。もう一方は法に帰依していく。法は仏陀の法ですから、結局は一つのはずです。だから、

南無阿弥陀仏と謂い、南無妙法蓮華経と謂つても、覚者に南無すること、妙法に南無すること、帰依、帰入することである。宗教的世界の法は、物理的世界の自然法や、道徳的世界の道徳法より次元の高い、むしろ絶対次元と申したい次元の法である。》

「奇跡」なんていうのは、霊法が働いている。それが自然現象、自然の法則を破っているよ



うに見えるから、奇跡だと言うだけで、靈法という所ではごく自然なんだ。靈法が自由に働いているだけだと。そういうふう^に仰つて、みんな法だという。

そこで、先程の207頁に参りまして、そういう方法が、どれも本ものならみな法が働いている。高次の次元の法がそこに働いている。その消息をつかましてくれものが御霊なんだと。キリスト教徒として「御霊」と言うと、他の宗教の人は、「では、我々のところは？」と言われるけど、「そこはご自分でお探さない」と言わなければいかんのですけれども。我々は御霊、真理の御霊だということですよ。

《ユダヤ教、キリスト教、回教、何であろうとそれを深くつかみ得る絶対境である。万法が帰一する消息は、法をして法たらしめている靈によつてつかめる。その靈の生命は愛の一語であらわすより仕方がない。

だから、「無」というのは虚無ではない。無限無量で表現できない。「愛」という言葉で表してもまだ限定的に感じる。だから、限定をとつぱらつてしまつて、「無」という言葉になつた。そういうことが「無の神学」ですから、「無は即無限無量」ということになつてくるわけです。そのほかには無とか空とかいうより仕方がなかつた。無量寿、無量光、無量愛こそは万法をして帰一たらしむる靈的内実である。

そして最も普遍的なことは万人にあてはまる。例えば空気は万人が無条件に、ただで呼吸している。無価値の空気が肉体には無限価値の絶対必要物である。靈気は魂の世界において同様に必要不可欠なものである。それゆえ万人は宗教人であると私は謂う。

空気は無条件に、無代価で吸っているでしょ。キリストの靈気、神さまの靈気は無条件、無代価で吸ってください。そんな汚れた人間は十字架が全部片づけてくれますよ、祈りというのは靈の呼吸ですよと。

靈気を呼吸することが祈りなのである。靈界に投身することを私は祈入といっている。いかなる文化文明のいとなみでも、いとなむ主体たる人間が、祈入によつて靈的原始力を受けると、いとなみが本ものとなつてくる。《

●新宗教改革——終末論的展望

そして、しばらく飛ばしまして、「新宗教改革——終末論的展望」です。ここに括めがあります。ちよつとそこを拾ひ読みします。

《新宗教改革——終末論的展望

「内村鑑三とその無教会」及び「万法帰一」の二論説に於て私は「新宗教改革」が何であるかを婉曲に語つたわけである。

婉曲どころか直接に語つたと思ひますけれども。

「新」とはネオス的新ではなく、カイノス的新のことである。旧びずつねに新たなる新



である。それは第一条件として、十字架の贖罪を全身で信受し、全身的帰入の態勢で祈り入って、聖霊という無比の賜たまものをつけると、という十字架・聖霊不可分の事態を根底とすればおのれは無となる。この無即無限無量、即ち、無は十字架が授け給った自我の解放、

もう解放されているんです。解放されたところに無限無量という御霊がくる。

無限無量は十字架のその場に来臨し給う聖霊である。

解放しておきながら放っておくということは絶対なさらぬ。根源的には成っている。それを自覚した時に入ってくる。それがあつた時、爆発して、体験的な聖霊のバプテスマという現象のちに起こるかもしれない。起きれば結構です。しかし、本当に自覚的にそれを受けとつた時に、もう即座にそこに来ていらっしゃるんだということです。

この事態は使徒たちが確然と証してくれた消息である。そして、私が幕屋、召団、教会論で述べたように、「二、三人わが名に在って集るところに我在り」とのキリストの霊的臨在にあずかること、その集りは、従来のどの宗派、形態にも関わらない。「新」の意味は、そういう非本質的なことは問題にしないことである。宗派あらずい、況んや宗派争いから生ずる戦争現象は、凡そ宗教から逸脱したものであることを銘記すべきである。信条、礼拝様式、教会堂の如何、宗教団体の組織如何、そういうことは第一義的問題でない。人間は運命、環境によって限定されてる相対的、特殊的存在だから、どれでも可い。むしろ百花繚乱的に大いにさまざまな宗派があつて可い。他の宗教に對しても、それを認識し、理解し、尊重するトランス「寛容」がなければならぬ。否、むしろ、本当に神・キリストの聖霊が内住してくるとそういう鴻大な宇宙的な気魄となつてくるから、一切を然るべく認識し、尊重し、そのいろいろな本質を把握し、他宗、諸相をつかみ、限界あらばそれをキリストの光で認識し、助成もするし、包摂してよいよ「キリストに在る」信仰のすべきを自覚することが出来る。

宇宙的なキリストに聖霊に在って把握されると、キリストの鴻大なる気宇がわが胸の中に澎湃ほうはいとして波うち、一切を超包する。もうプロテスタントの、カトリックのと、そういう小さな差別相からはつき抜けてしまふ。集会の在り方も聖霊の愛の力で弾力性ができてくる。私が幕屋的な動的な在り方を唱道する所以である。大空が幕屋であるといったイザヤのような気宇である。また「二、三人わが名に在って集る所に我在り」という極小の中に極大が反映しているのである。

問題中の問題は、本当に十字架を体受しているか。本当に聖霊が内住しているか。然らば本当にキリストの無者であるか、然らばキリストに在って無限無量なるものを賜つて、一切の差別相を超越し、且つ親しく包摂しているか。諸々の矛盾、逆説を十字架で受け入れ、荷い、大調和を大宇宙の如く胸三寸の中に蔵めているか。あらゆるものをオリエンテーレン(位置づけ)して霊的有機体的に把握しているか、劇的な宇



宙と歴史を認識し、過去と未来を終末的現在にとらえているか。黙示録が啓示している象徴的な歴史の終末と、終末の新天地の大希望、大現実を聖霊の光の中で霊視しているか。聖霊の自然の愛の中に人間的な愛を融合させて、人類の歴史の深刻な矛盾と涙と血のため、全存在を祈りとしているか。

この最後なんか凄いですね。「聖霊の愛の中に人間的な愛を融合させているか」と。人間的愛を否定しない。人間的愛は自然な情感として素晴らしい。それを聖霊の愛と融合すると、そこで本当の人類に対しての祈りとなる。

今、チェチェンで紛争になった。これからまたアラブの世界で深刻なことが起こるかも知れない。いろんな所で飢えている人たちがいる。戦争は止まない。そういう現実に対する本当の執り成しの祈り。これは聖霊によって初めて出てくる。

人類の歴史の深刻な矛盾と涙と血のため、全存在を祈りとしているか。私の筆はここで折れた！これが新宗教改革への祈りである。南無キリスト！ 合掌。》

これは素晴らしい文章です。この宇宙の叫びです。この終りの所なんかは一気に書かれたと思います。これは私の魂を揺さぶりました。本当にネオスでありました。カイノスであるにもかかわらず、ネオスの気持ちでこれを読みました。

この感動をなんとか皆さんに伝えたい。そういう思いで今日やって来たんですよ。時間に限られていますけれども。私はいつもこの『キリスト道』という本を持っている。曠愛新書の第6号です。これが最後の号でした。もちろんここに書かれていることはどこかの先生の著作集に収録されています。しかし、この一冊の小冊子として一つのまとまりをもって素晴らしいんですよ。ぶ厚い本は電車の中に持つて入るのはカバンが重い。これと新約聖書のこの二つはいつも持つている愛読書です。どこを開いても、赤線だらけ、黄色も塗って、これが私に迫ってくる。先生は論説で非常にかみ砕いて丁寧に言ってもらえることを、こちらの方はごく簡単にまとめて要約しておられたりする。

読売新聞に連載された「霊的な一大突破！」も、「田毎の月影」、「悲願霊願」も素晴らしい。ですから、こういう「曠愛新書」は「曠愛新書」としての一つの独立性を持っています。その時、その時に先生が編纂されて書かれているものだから、これも愛読、携行していただきたいなという思いをもって、今日持つてきました。

それから、『エン・クリスト』誌も、『ハレルヤ』誌もそうです。やっぱりその時その時代の時代を反映しているものもそれなりにいい。それから、一書に集約されて永く残るものもないと思う。両方ですね、読者にとつては。やはり本というものは読んで、魂が感動に打ち震えるようなもの、霊の渇きが癒されるようなもの、そういうものがある。新種的なものを与えてくれるものも我々はうれしいと思いますけれども、同時に心を養い、祈りへと導いてくれるもの、そういうものをいつも大事にして、先程言いましたような、

「我々の全生涯が常に回帰であり、祈りであるように」



ということがあまり苦勞しないで現実化します。そういう一つのトレーニング方法ですね。練習方法、それを皆さんにお示したいなという思いでいます。

● 祈り

それでは一言お祈りをいたしましたして終りとします。

主さま、ありがとうございます。本当にこの空間を、この時と所を、永遠の時とし空間とし、光で満たし霊で満たしてくださったことを感謝いたします。主さま、あなたのこととはすべて時に適って、うるわしくございます。主さま、すべては御手の業でございます。主さま、病気になることも、健やかなになることも、あなたは全部御存知で然るべき時をそなえ、然るべき時にそれを与え、それをいよいよ私たちの生長の糧としてくださることを感謝いたします。

本当にパウロがローマ書8章26節以下で告白してくださったように、

「御霊言ひ難き呻きをもつて執り成し給い、そして、愛する者のためには一切のことが働きて善となることを我々は知っている。遂に私たちを召し、召したる者を義とし、義としたる者に光榮を与え、そして遂に御子の御形に榮光の御姿に化してくださる」

と。主さま、ありがとうございます。私たちはこうして本当に、この兄弟姉妹たち、心を一つにし、思いを一つにしてあなたの御霊の世界に導かれ、それを味わい知ることができました。主さま、この兄弟姉妹たちがそれぞれの所にお帰りになって、それぞれの集会、それぞれの持ち場において、そこを祝福し、御霊の愛をもってあなたが包み、そしてそこにネオスの現象を通してカイノスが、あなたの永遠の現在を、そして愛の質を、御霊の生命を、そこに現して行つてくださいますように希い奉ります。

今日のこの日を感じ、この時を感謝し、兄弟姉妹の祈り、また集会に来ることができなかつた姉妹方の祈り、各地の兄弟姉妹の祈りと合わせ、今、御名にあつて御前にお捧げいたします。アーメン。

